

論文

ビジネス教育の発展を目的としたグランドデザインに関する考察

加藤 千景、尾碕 眞、吉田 聡

キーワード

ビジネス教育、学習指導要領、グランドデザイン、学校教育全体構想図

1. はじめに

ビジネスの多様化に伴い、学校教育段階においても人材育成の手法が大きく変化している。これまで、商業科を持つ高等学校を中心にビジネス教育の変遷を明らかにしたうえで、学習指導要領に基づいたビジネス教育の特徴を示すとともに、実際の学校現場における課題を示してきた。

ビジネスの多様化に対応した人材育成を行うには、社会が求める人材像について検証を行うとともに、これに対応するための教育現場での実践が必要となる。このため、単に学習指導要領に基づいた学習内容の見直しを行うだけでなく、課外活動、特別活動および学校行事など人間形成に重点を置いた教育の検討も重要と考えられる。

こうした状況に応えるべく、商業科を持つ高等学校においては共通教科での取組を明確にするほか、専門教科「商業」での取組、育てたい人材像、身に付けたい資質・能力、学年ごとの取組、進路指導、教務指導、生徒指導、学校行事等の役割、地域連携での取組、部活動の位置づけなどをこれまで以上に明確化するようになった。これに加え、例えば愛知県立岡崎商業高等学校においては、即戦力となる社会人の育成を目標に具体的なグランドデザイン（学校教育全体構想図）を構築した。

本論文では、高等学校の共通教科を含めた学習指導要領に基づく教育課程を述べるとともに、グランドデザイン構築の概要について述べる。そのうえで、グランドデザインの効果を検証するためのアンケート調査およびその成果について考察を行う。本論文の執筆にあたっては、1章、5章、および6章については吉田聡、2章については尾碕眞、3章および4章については加藤千景がそれぞれ担当した。

2. ビジネス教育における共通科目

商業高等学校の専門科目¹はAGU ビジネスレビュー第1号「商業教育の現状と課題について」²にて、吉田 聡、加藤千景、尾碕 眞により検討済みである。しかし、共通科目³についてはまだ述べていなかった。そこで、この共通履修科目について、文部科学省学習指導要領解説⁴により、その科目の性格と科目の目標を以下に述べることにした。

2. 1 国語

(1) 国語総合

1. 国語総合は、教科の目標を全面的に受けた基本的な科目であり、すべての生徒に履修させる共通必修科目として設定した。小学校及び中学校と同様に、A 話すこと・聞くこと、B 書くこと、C 読むこと、及び伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の3領域1事項から内容を構成することとし、各領域には言語活動を例示するなど、それぞれの領域の特性を生かして指導の効果を高めることができるようにしている。

2. 目標は、国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てるとしている。この科目の目指すべきことは、思考力や想像力を伸ばさせるとともに、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな感性や情緒をはぐくむこと、言葉の適切さや美しさについての感覚を磨き、表現の効果について適切に判断する能力を一層向上させること、様々な言語文化に目を向け、それらについての関心を深めること、国語を尊重し、国語の向上を図る態度を育成することである。

(2) 国語表現

1. 国語表現は、国際化、情報化が進展し、価値観が多様化している中、人々の生活環境、言語環境がこれまでとは比較にならないほど急速に変化し、言語生活や言語活動もますます多様になってきている。その中であって、様々な情報を適切に判断し取捨選択する力や、筋道立てて物事について考える力、豊かな発想の基となる創造する力などを身に付けることが一層求められるようになり、その基盤となる、言語により理解し、思考し、表現する能力を確実に身に付ける必要性がますます高まっている。とりわけ表現する能力を高めることは、これからの社会に生きていくためには必要不可欠なことである。国語表現は、このことを踏まえ、これま

¹ 主として専門学科において開設される。

² 愛知学院大学ビジネス科学研究所，AGU ビジネスレビュー第1号，2021年3月，pp14-31。

³ 各学科に共通する各教科、科目。学校教育法施行規則（抄）昭和二十二年五月二十三日文部省令十一号 一部改正：平成二十一年三月九日文部科学省令第三号。

別表第三（第八十三条，第八十八条，第二百二十八条関係）（一）各学科に共通する各教科、各教科に属する科目。

⁴ 平成20年、21年告示、平成25年実施、文部科学省学習指導要領の解説を参考にした。

での国語表現Ⅰ及び国語表現Ⅱの内容を再構成して置いた選択科目である。共通必修科目である国語総合の3領域1事項のうちA話すこと・聞くこと、B書くことと伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項とを中心として、その内容を発展させている。

2. 目標は、国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てるとしている。教科の目標を主として表現の面で受け、伝え合う力を高めるとともにこの部分を境に2つの部分から構成している。前段では、適切かつ効果的に表現する能力を育成すること、伝え合う力を高めることを示し、後段では、思考力や想像力を伸ばすこと、言語感覚を磨くこと、進んで表現することによって国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育成することを示している。国語の向上を図る態度を育てることは、今回の改訂で新たに加えたものである。このことは教科の目標に掲げていることから、これまでも国語表現Ⅰ及び国語表現Ⅱで指導していた。今回、その大切さを一層強調するため、国語表現においても明示することとした。

(3) 現代文A

1. 現代文Aは、読む対象を近代以降の文章とし、古典Aと対をなす科目として新たに置いた選択科目である。共通必修科目である国語総合の3領域1事項のうち、C読むことの近代以降の文章の分野と伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項とを中心として、その内容を発展させている。この科目では、近代以降の様々な文章、とりわけまとまりのあるものを読んで、我が国の言語文化に対する理解を深めること、生涯にわたって読書に親しむ態度を育てることなどをねらいとしている。そのため、主体的に文章を読み、それを基に考察すること、言語文化に関する課題を自ら設定して探究することなどを重視している。このような学習によって、国語の向上を図る態度や、言語文化の継承と創造の担い手となる資質を育成することができる。

2. 目標は、近代以降の様々な文章を読むことによって、我が国の言語文化に対する理解を深め、生涯にわたって読書に親しみ、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。現代文Aの目標は、教科の目標を主として読むことと言語文化との2つの面で受けている。まず、読む対象として近代以降の様々な文章を示し、それらを読むことによって、我が国の言語文化に対する理解を深めることと、生涯にわたって読書に親しみ、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育成することを示している。我が国における伝統的な言語文化を継承して創作された近代以降の文章を読んで、我が国の文化としての言語や文化的な言語生活、さらには、多様な言語芸術や芸能などについて探究し、それらの特質についての理解を深めることである。我が国の言語文化についての理解を踏まえて、国語そのものや自らの言語の運用を省み、その長所を伸ばし、不十分なところがあれば改善して国語の向上を図る態度を育成するとともに、言語文化を質の高いものにして社会生活の充実を図る態度を育成することである。

(4) 現代文B

1. 現代文Bは、これまでの現代文の内容を改善して置いた選択科目である。近代以降の

文章を的確に理解する能力を高めることとともに、適切に表現する能力を高めることを新たに目標に明示して、共通必修科目である国語総合の総合的な言語能力を育成する科目としての性格を発展させている。この科目では、近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めること、思考力や想像力、認識力を伸ばし感性や情緒をはぐくみ、進んで読書して国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てることをねらいとしている。

2. 目標は、近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てるとしている。目標によれば、高めることとともにの部分に境にした、前段と後段の2つの部分から構成されている。前段では、的確に理解し、適切に表現する能力を高めることを示し、後段では、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育成することを示している。国語の向上を図る態度を育てることは、今回の改訂で新たに加えたものである。このことは、教科の目標に掲げていることから、従前も現代文で指導していた。今回、その大切さを一層強調し、現代文Bにおいても明示している。

(5) 古典A

1. 古典Aは、時代がいかに変わろうとも普遍的な教養があり、かつて教養の大部分は古典などの読書を通じて得られてきた。また、古典は文化と深く結び付き、文化の継承と創造に欠くことができないものである。古典Aは、このような、文化の基盤としての古典の重要性を踏まえ、これまでの古典講読の内容を改善して、現代文Aと対をなす科目として置いた選択科目である。共通必修科目である国語総合の3領域1事項のうち、C読むことの古典の分野と伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項とを中心として、その内容を発展させている。この科目では、古典などを読んで、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することをねらいとしている。そのため、小学校、中学校及び国語総合の指導との一貫性を図りながら、伝統的な言語文化に関する課題を設定して探究したり、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について生徒に考えさせたりして、伝統的な言語文化を継承し、現代に生かすために、古典への興味・関心を広げることを重視している。このような学習によって、言語文化の継承と創造の担い手となる資質を育成することができる。

2. 目標は、古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。古典Aの目標は、教科の目標を主として読むことと言語文化との2つの面で受けている。まず、読む対象として、古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を示し、それらを読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深めることと、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することを示している。これは、今回の改訂において小学校、中学校及び国語総合と一貫して重視している、古典に親しむための指導を一層推進するためである。日常生活において古典や古典に関連する文章を読むことを通して、古典の中の人間の生活や人生を知り、自らの生き方を

見つめ直すとともに進むべき方向を模索しようとする態度、また、古典などの表現から自らの思考や感情を表現する様々な方法を見だし、表現に生かそうとする態度などを育成することになる。

(6) 古典 B

1. 古典 B は、いつの時代でも、伝統を継承しつつ新たな文化を創造していくことは大切なことであるが、知識とそれを活用することの重要性が増すこれからの社会においては、蓄積された様々な経験や知識などの知が継承され、新たな創造や工夫につながっていくことが一層求められる。古典 B は、そのような状況を踏まえ、これまでの古典の内容を改善し、共通必修科目である国語総合の 3 領域 1 事項のうち、C 読むことの古典の分野と伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項とを中心として、その内容を発展させた選択科目である。この科目では、古典を読む能力を養うとともに、思考力を伸ばし、感性や情緒をはぐくみ、古典を通して人生を豊かにする態度を育成することをねらいとしている。したがって、古典 B において様々な教材を系統的に取り上げ、ある程度幅広く指導することは、古典を読む能力を養い、古典についての理解や関心を深める上で効果的であるとともに、古典の価値について考えを深め、我が国の文化の特質、我が国の文化と中国の文化との関係などについて考える上でも有効である。さらに、古典 B の指導は、将来にわたって古典を主体的に学ぶ基礎を培うという重要な役割も担っている。

2. 目標は、古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。古典 B の目標は、教科の目標を主として読むことの面で受け、養うとともにの部分と境に 2 つの部分から構成している。前段では、古典を読む能力を養うことを示し、後段では、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることを通して人生を豊かにする態度を育成することを示している。古典 A の目標と同様に、取り扱う教材の、時代的な範囲や種類、価値などを示しているが、古典 B では、古典を読む能力を養うことを中心的なねらいとしている。古典の学習を通して古典の豊かな世界に触れ、ものの見方、感じ方、考え方を広げ深めるとともに、古典の学習に主体的に取り組むことによって、一層古典に親しむ態度、我が国の伝統と文化を尊重する態度を身に付けることができる。

2. 2 地理歴史

(1) 世界史 A

1. 世界史 A は、世界の歴史の大きな枠組みと展開を、近現代史を中心に理解させる科目である。改訂でも、その趣旨を受け継ぐとともに、引き続き世界史が地理歴史科共通の必修科目であることを考慮して、近現代の世界の形成過程を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら、学習させることを第一のねらいとした。次に世界史 A の内容構成の特質として、文明史的な構成及び世界の一体化の過程を重視した構成を挙げることができる。特に 2 単位の標準時数の中で、近現代の基本的事項を学習させる工夫が必要である。そのため

各項目に示された趣旨を十分踏まえ、生徒の興味・関心に応じた学習の充実を図ることが大切である。

2. 目標は、近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養うとしている。目標によれば、世界の歴史の展開を、全時代にわたって均等に扱うのではなく、近現代史を中心に扱う。いかなる国、地域も他国、他地域との関係を離れては存在できない現代において、世界の構造や成り立ちを歴史的視野から考察する能力、自己の属する国や地域の理解の上に、他国、他地域との協調関係を築いていく態度は、いずれも不可欠の条件といえる。こうした認識に立って、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことが、最も重要なねらいである。

(2) 世界史 B

1. 世界史 B は、世界の歴史の大きな枠組みと展開を、各時代、各地域の歴史の重要な事項を中心に学ぶ科目である。世界史 B では標準単位数 4 単位で古代から現代までの世界の歴史の基本的な事柄を学習する。小・中学校までの世界の歴史の学習については、中学校社会科において、日本の歴史の背景として取り扱われていることもあり、生徒にとって、高等学校の世界史 B は、世界史 A と同様、初めてまとまった形で世界の歴史を学習する科目である。世界史 B の内容は、複雑で多様な世界の歴史を生徒が分かりやすく学ぶために、世界史 B は、詳細で専門的な世界の歴史を学ばせようとするものではない。世界の歴史への興味・関心を引き出し、それをもとに世界の歴史の基本的な事項を理解させるとともに、それぞれの大項目の内容に示された事項を参考にして主題を設定し、生徒の主体的な学習を通して歴史的思考力を培うことを目指した科目である。

2. 目標は、世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。第 1 の部分は、古代から現代に至る世界の歴史の展開を、諸地域世界の動向に焦点を当てながら、その形成、交流と再編、結合と変容、及び地球世界の形成という大きな時間的枠組みの中で理解させようとするものである。従前大きな枠組みと流れとなっていたものを大きな枠組みと展開と改めたのは、世界の歴史を構造的に理解させるという趣旨を明確にするためである。第 2 の部分は、学習の展開と方法にかかわるねらいを示している。世界史 A と同様、年表、地図その他資料の活用を通して世界の歴史を理解することで、知識基盤社会といわれる今日の社会の構造的変化に対応していくための思考力・判断力・表現力等の育成を図ることを目指している。第 3 の部分は、世界史 A の目標と同じ表現となっている。世界史 A と世界史 B は、構成や学習内容に相違があり、それぞれ独立した科目となっているが、世界史を学習することによって得られる能力や態度に関しては共通の目標を設定している。他国や他地域の歴史を理解し、自国と世界とのかかわりを学び、日本の歴史や文化をより客観的に見る

目を養う。そして、世界の形成の歴史的過程、文化の多様性・複合性や現代世界の特徴などを学習することによって、歴史的思考力を培う。これらを通じ、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことが、この科目の最も重要なねらいである。

(3) 日本史 A

1. 日本史 A は、我が国の歴史の展開について、近代社会が成立し発展する過程に重点をおいて考察し、世界史的な視野に立って理解させることをねらいとした科目として、平成元年の改訂において設置されたものである。今回の改訂においては、近現代を対象とした科目という性格を明確化するとともに、歴史の展開をその推移や変化、因果関係等の考察を通して大きくとらえることや、主題を設定して主体的に探究し表現する活動を一層重視して内容を構成した。日本史 A は 2 単位が標準であることを踏まえて、近現代を対象として構成した。以上から、これまでも重視してきた生徒の主体的な歴史学習を促し豊かな歴史的思考力を育成するとともに、現代の日本と世界についての課題意識や思考力・判断力・表現力等を養うことを目指した多彩な指導の展開が、より一層可能になる。

2. 目標は、我が国の近現代の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付け、現代の諸課題に着目して考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養うとしている。目標によれば、日本史 A の基本的な性格として、近現代の我が国の歴史を学習対象とすることを明確にしている。この科目を学習することによって得られる能力や態度に関する目標である。諸事象の本質をその歴史的な形成・展開の過程の実証的な考察によってとらえる歴史的な見方や考え方を身に付け、歴史的な思考力の育成を図るとともに、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことが、この科目の最終的なねらいである。

(4) 日本史 B

1. 日本史 B は、地理歴史科に属する標準単位数 4 単位の科目である。平成元年の改訂において、それまでの日本史を基盤にして設置された、日本史を総合的な観点から学習する科目である。小学校においては、我が国の歴史の主な事象を人物の働きや代表的な文化遺産を中心に学習する。中学校の歴史的分野においては、我が国の歴史の大きな流れを世界の歴史を背景に学ぶ。高等学校の日本史 B においては、我が国の歴史の展開について、世界史的視野に立って各時代の特色及び変遷を総合的に考察させ、我が国の伝統と文化についての認識を深めさせることを科目の基本的な性格としている。これは、学習の対象を狭い意味の自国史のみに限定することなく、各時代における国際環境との関連を視野に入れ、空間的なつながりや世界史的な観点から我が国の歴史と文化を考える学習を重視したものである。そのためには、我が国の歴史の展開について、政治や経済、社会、文化、国際環境など各時代の特色及びその変遷にかかわる総合的な考察や、それに基づく歴史的思考力の育成が重要である。この点に、高等学校段階の日本史学習としての日本史 B の特性があるといえる。

2. 目標は、我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。目標は、次の部分からなっている。諸事象の本質をその歴史的な形成・展開の過程の実証的な考察によってとらえる歴史的な見方や考え方を身に付け、歴史的な思考力の育成を図るとともに、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことが、この科目の最終的なねらいであることを示している。

(5) 地理 A

1. 地理 A は、地理歴史科の中に設けられた標準単位数 2 単位の科目であり、内容は、(1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察、(2) 生活圏の諸課題の地理的考察の 2 つの大項目で構成されている。地理 A は、グローバル化の進展、国際情勢や地球環境の変化などに伴う現代世界が抱える諸課題と、生活圏などの地域にみられる諸課題を地理的に考察する科目である。そのために、この科目は、作業的、体験的な学習をより一層重視して、様々な諸課題を日常生活と関連付けて取り扱い、地理的技能を身に付けさせるとともに、地理学習の有用性に気付かせ、生徒の学習意欲を高めることに配慮した内容や方法を工夫している。現代世界や生活圏の諸課題について、主に主題的な方法を基にして学習できるようにしているのも、そうした点を踏まえたものである。

2. 目標は、現代世界の地理的な諸課題を地域性や歴史的背景、日常生活との関連を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。地理 A の目標は、現代世界の諸課題を地理的に考察することに重点を置いて、現代世界の地理的認識を深めさせるとともに地理的な見方や考え方などを身に付けさせるというこの科目の基本的なねらいと、この学習を通して育成しようとする能力や態度にかかわるねらいを示している。また、それは、中学校社会科の目標との関連付けを図ること、高等学校における地理教育の専門性を重視することなどの点を考慮し、最終的には地理歴史科の目標の達成を目指して設定したものである。

(6) 地理 B

1. 地理 B は、地理歴史科の中に設けられた標準単位数 4 単位の科目であり、内容は、(1) 様々な地図と地理的技能、(2) 現代世界の系統地理的考察、(3) 現代世界の地誌的考察の 3 つの大項目で構成されている。地理 B は、様々な地図の読図や作図などの作業的、体験的な学習によって身に付けた地理的技能、系統地理的な考察によって習得した知識や概念を活用して、現代世界の諸地域の特色や諸課題を地誌的に考察する科目である。そのために、この科目は、地図の読図や作図など地理的技能の育成を主眼とした学習、系統地理的学習、地誌的学習を行う各大項目から構成され、地理学の体系や成果を踏まえた上で、最後に我が国の地理的な諸課題を探究する学習を設けて科目のまとめとしている。

2. 目標は現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域、歴史的背景を踏ま

えて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。地理 B の目標は、現代世界の地理的事象を系統地理的に考察し、その成果を受けて現代世界の諸地域の歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、もって現代世界の地理的認識を深めさせるとともに地理的な見方や考え方を身に付けさせるというこの科目の基本的なねらいと、これらの学習を通して育成しようとする能力や態度にかかわるねらいを示している。また、それは、中学校社会科の目標との関連付けを図ること、高等学校における地理教育の専門性を重視することなどの点を考慮し、最終的には地理歴史科の目標の達成を目指して設定したものである。地理 B では、現代世界の地理的認識を深めるとともに地理的な見方や考え方を培う学習を通して、最終的には国際社会に主体的に対応して生きるとともに、平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことを目指している。

2. 3 公民

(1) 現代社会

1. 現代社会は、科目設立以来、現代社会の基本的な問題に対する判断力の基礎を養うとともにそれと関連させながら人間としての在り方生き方を考える力を養うことを基本的なねらいとしてきた。今回の改訂では、この基本的なねらいや特色を引き継ぎながら、道徳教育及び基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用する学習活動を充実させる観点から、社会の主体的な形成者として、社会の在り方について考察するための基本的な枠組みを学んだり、人間としての在り方生き方にかかわる問題について議論したり考えたりしてその自覚を一層深めることを重視して改善を図り、(1) 私たちの生きる社会、(2) 現代社会と人間としての在り方生き方、(3) 共に生きる社会を目指しての大項目で構成するように改めた。また、学び方の習得については、生涯にわたって主体的に学習に取り組むことができるよう学習方法や課題の探究方法などを各大項目のねらいに即して身に付けさせることが必要である。

2. 目標は、人間の尊重と科学的な探究の精神に基づいて、広い視野に立って、現代の社会と人間についての理解を深めさせ、現代社会の基本的な問題について主体的に考察し公正に判断するとともに自ら人間としての在り方生き方について考察する力の基礎を養い、良識ある公民として必要な能力と態度を育てるとしている。現代社会の科目の目標については従前と基本的には同じである。民主主義の基本理念と、社会認識に基づいて学習を展開するものであることを明示している。現代の社会的事象を多面的・多角的にとらえ、グローバル化の進展を視野に入れた学習を意味し、この後に続く部分すべてにかかっている。最後の部分は、従前と同様に公民科に属する他の 2 科目と共通の表現になっており、広く、自らの個性を発揮、伸ばしつつ文化と福祉の向上、発展に貢献する能力と、国家・社会の有為な形成者として平和で民主的な社会生活の実現、推進に向けて主体的に社会の形成に参画する態度を育てることが、公民科の究極のねらいである。

(2) 倫理

1. 倫理は、公民科の1科目として、公民科の目標の下に、人格の形成に努める実践的意欲を高め、良識ある公民として必要な能力と態度を育てることを目指して設けられた科目である。これにかかわって、青年期における自己形成の課題、及び人間としての在り方生き方について理解と思索を深めさせることも目指している。高等学校の生徒は、一般に、人生をどう生きてよいか、自己とはどのような存在なのか、社会にどのようにかかわっていけばよいかなど、人間や社会について問いをもつ時期にある。特に今日、価値観が多様化し、物質的に豊かな社会にあって、青年期という発達の段階に伴う悩みを超えて、生きていく上でより深刻な悩みや様々な課題に直面する生徒が多くなっている。生徒のこれらの関心や悩みに応え、人生にかかわる諸課題について探究を深め、自己の確立を目指すことが教育上の重要な課題となっている。倫理においては、社会の変化に主体的に対応できる良識ある公民として必要な能力と態度を育てることが求められているのである。また、人間の存在や価値について思索を深め、生徒が自らの人格の形成に努める実践的な態度を育てるといふ、倫理が従前からもっている基本的な性格は、変わることなく継承されている。

2. 目標は、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念に基づいて、青年期における自己形成と人間としての在り方生き方について理解と思索を深めさせるとともに、人格の形成に努める実践的意欲を高め、他者と共に生きる主体としての自己の確立を促し、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。目標には、民主的な社会においては、一人一人の人格を尊重するということが基本的な精神とされている。また、生命に対する畏敬の念は、基本的精神である。青年期における自己形成の課題について自ら思索する、人格の形成に努め、それが生徒自身の人格形成に結び付いていくものでなければならない。他者と共に生きることを主体として良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。これは公民科に属する他の2科目と共通の表現である。

(3) 政治・経済

1. 政治・経済は、現代の政治、経済、国際関係の動向や本質を把握させ、それらに関する客観的な見方や考え方を深めさせて、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養うことを基本的性格としている。今回の改訂では、グローバル化や規制緩和が進展し一層の変化が予想される社会において、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きること、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力の育成が求められていることに留意した。これらの資質や能力は、これまでも公民科で重視されてきたものであり、とりわけ、政治・経済においては、今までと同様に、自ら考え、判断し行動できる資質や能力の基礎として、見方や考え方を深めることに重点を置いた学習が必要となる。また、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質の基礎として、公正な判断力を育成することが必要となる。そのため、現実の社会においては様々な立場やいろいろな考え方があることについて理解し、それらを踏まえて現代社会の諸課題について判断させ、社会に関する健全な批判力を育成することが必要である。今回の

改訂においても、中・高等学校の関連に留意し、見方や考え方をはじめこれらの能力や態度を連続的に成長させることが必要であり、この科目固有の性格を一層明確にした指導が求められる。

2. 目標は、広い視野に立って、民主主義の本質に関する理解を深めさせ、現代における政治、経済、国際関係などについて客観的に理解させるとともに、それらに関する諸課題について主体的に考察させ、公正な判断力を養い、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。目標は、次の各部分から構成されている。広い視野に立って民主主義について理論的、体系的に理解させる。政治、経済、国際関係などの本質や動向を把握し客観的に理解させ、政治や経済の基本的な見方や考え方を身に付けさせる。政治、経済、国際関係などの学習を通して身に付けた見方や考え方に基づいて、現実の諸課題をとらえ望ましい解決の在り方について主体的に考察させて、公正に判断する能力や健全な批判力を養うことを意味している。また、最後は従前と同様、公民科に属する他の2科目と共通の表現となり、公民科の究極のねらいを示している。

2. 4 数学

(1) 数学 I

1. 数学 I は、今回の改訂で数学科の共通必修科目となった。したがって、この科目は、この科目だけで高等学校数学の履修を終える生徒と引き続き他の科目を履修する生徒の双方に配慮し、高等学校数学としてまとまりをもつとともに他の科目を履修するための基礎となるよう、(1) 数と式、(2) 図形と計量、(3) 二次関数、(4) データの分析の4つの内容で構成した。また、この科目には課題学習を位置付けて数学的活動を一層重視し、生徒の主体的な学習を促すとともに、数学のよさを認識できるようにしている。

2. 目標は、数と式、図形と計量、二次関数及びデータの分析について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察する能力を培い、数学のよさを認識できるようにするとともに、それらを活用する態度を育てるとしている。この目標から、(1) 数と式では、実数についてまとめるとともに、式の展開と因数分解及び一元一次不等式について扱う。また、従前の数学 A で扱っていた集合と論理もここで扱う。(2) 図形と計量では、角の大きさなどを用いて図形の計量を扱う。(3) 二次関数では、二次関数を中心に具体的な事象の考察を通して数量の変化をとらえたり、二次不等式などに活用したりすることを扱う。(4) データの分析では、中学校で扱っている資料の平均や散らばりの考えをさらに発展させて、分散、標準偏差、散布図及び相関係数などを扱う。これらの内容について、理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図りと示されている。

(2) 数学 II

1. 数学 II は、数学 I を履修した後に、履修させることを原則としている。この科目は、高等学校数学の根幹をなす内容について学習し広い数学的な資質・能力を育てるため、数学 I の内容を発展、拡充させるとともに、数学 III への学習の系統性に配慮し、(1) いろいろな式、(2) 図形と方程式、(3) 指数関数・対数関数、(4) 三角関数 (5) 微分・積分の考えの5つの内

容で構成した。

2. 目標は、いろいろな式、図形と方程式、指数関数・対数関数、三角関数及び微分・積分の考えについて理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し表現する能力を養うとともに、それらを活用する態度を育てるとしている。この目標から、いろいろな式では、整式の乗法・除法や分数式の計算をすること、等式と不等式の証明をすること、数の範囲を複素数まで拡げて二次方程式や高次方程式を解くことを中心に扱う。図形と方程式では、直線や円などの図形を方程式で表現し、それを用いて図形の性質や位置関係を考察することを中心に扱う。指数関数・対数関数では、指数を実数まで拡張して指数関数及び対数関数を扱う。三角関数では、角を一般角まで拡張して三角関数を扱う。微分・積分の考えでは、関数の値の変化を調べたり面積を求めたりするなど、微分・積分についての基本的な考えを扱う。これらの内容について、理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図りと示されている。さらに、事象を数学的に考察し表現する能力を養うと示されている。この能力は、ある課題に関心をもち、その解決に当たって、これまでに学習した知識等を基にして考察を進め、一般的な方略などを見付けて、それを適切に表現するという学習を通して育成される。最後に、それらを活用する態度を育てると示されている。それらとは、それ以前に述べられている内容のすべてを総括して受けている。

(3) 数学Ⅲ

1. 数学Ⅲは、数学Ⅱを履修した後に、履修させることを原則としている。この科目は、数学に強い興味や関心をもってさらに深く学習しようとする生徒や、将来、数学が必要な専門分野に進もうとする生徒が履修する科目であり、数学Ⅱの内容を発展、充実させるとともに、内容相互の関連を重視し(1) 平面上の曲線と複素数平面、(2) 極限、(3) 微分法及び(4) 積分法の4つの内容で構成した。

2. 目標は、平面上の曲線と複素数平面、極限、微分法及び積分法についての理解を深め、知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し表現する能力を伸ばすとともに、それらを積極的に活用する態度を育てる。平面上の曲線と複素数平面では、平面上の曲線のいろいろな表示と複素数平面を扱う。極限では、数列及び関数値の極限を扱う。微分法及び積分法では、多項式関数のほかに分数関数、無理関数、三角関数、指数関数及び対数関数の微分法及び積分法について、数学Ⅱの微分・積分の考えを発展、充実させて扱う。これらの内容について、理解を深め、知識の習得と技能の習熟を図りと示されている。知識が基になって技能に習熟するとともに、技能に習熟することにより知識がより確かなものになることから、知識の習得と技能の習熟とは一体のものとして表現されている。このような活動を通して、学習の成果がより確かなものになるとともに、新たな課題の解決に数学を活用しようとする態度が育成される。

(4) 数学A

1. 数学Aは、数学Iとの並行履修又は数学Iを履修した後の履修を原則としている。この科目は、中学校数学の内容を踏まえ数学Iの内容等を補完するとともに、事象を数学的に考

察する能力を養い、数学のよさを認識できるようにするため、(1) 場合の数と確率、(2) 整数の性質及び(3) 図形の性質の3つの内容で構成した。従前の数学Aとは異なり、生徒の実態等に応じて3つの内容からその内容を適宜選択して履修させることとした。すなわち、これらの内容は3単位程度を要するが、標準単位数は2単位であり、生徒の実態や単位数等に応じて内容を適宜選択させることとしている。指導に当たっては、履修目的に沿って、履修内容や履修順序、単位数を適切に定めるとともに、各科目間の内容相互の関連と学習の系統性を十分に図り、生徒の多様な特性等に対応できるようにする。また、この科目には課題学習を位置付けて数学的活動を一層重視し、生徒の主体的な学習を促すとともに、数学のよさを認識できるようにしている。

2. 目標は、場合の数と確率、整数の性質又は図形の性質について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察する能力を養い、数学のよさを認識できるようにするとともに、それらを活用する態度を育てるとしている。この目標から(1) 場合の数と確率では、従前の数学Aの(3) 場合の数と確率と、数学Cの(3) 確率分布の一部、条件付き確率とを合わせて扱う。整数の性質では、従前の数学Bの数値計算とコンピュータで扱われていたユークリッドの互除法を中心に、中学校までに扱われている整数に関する内容を適宜振り返ってまとめるとともに、発展させて扱う。図形の性質では、従前の数学Aの(1) 平面図形から中学校へ移行された円周角の定理の逆を除いた内容と作図及び空間図形を扱い、数学Iの(2) 図形と計量の内容を補完する。これらの内容について、理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図る。また、事象を数学的に考察する能力を養いと示され、例えば、身近にある不確定な事象を数量的にとらえる確率の学習を通して、不確定なものにとらえる数学の考え方などの数学のよさを認識できるようにする。それらを活用する態度を育て、このような活動を通して、新たな課題の解決に数学を活用していこうとする態度や具体的な事象を数学的に処理するための基礎を身に付けることができる。

(5) 数学B

1. 数学Bは、数学Iを履修した後に、履修させることを原則としている。この科目は、数学的な素養を広げようとする生徒や、将来、自然科学や社会科学などの分野に進もうとする生徒の数学的な資質や能力を育てるため、数学Iより進んだ内容で数学の活用面において基礎的な役割を果たすと考えられる(1) 確率分布と統計的な推測、(2) 数列及び(3) ベクトルの3つの内容で構成した。従前の数学Bと同様、生徒の実態に応じてその内容を適宜選択して履修させることとした。3つの内容のすべてを履修させるときは、3単位程度を要するが、標準単位数は2単位であり、生徒の実態や単位数等に応じて内容を適宜選択させることとしている。指導に当たっては、履修目的に沿って、履修内容や履修順序、単位数を適切に定めるとともに、各科目間の内容相互の関連と学習の系統性を十分に図り、生徒の多様な特性等に対応できるようにすることが大切である。

2. 目標は、確率分布と統計的な推測、数列又はベクトルについて理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し表現する能力を伸ばすとともに、それら

を活用する態度を育てる。(1) 確率分布と統計的な推測では、確率の概念を数学的にまとめ、確率変数とその分布を扱うとともに、統計的な推測の考えを扱う。(2) 数列では、等差数列、等比数列や漸化式で表された簡単な数列及び数学的帰納法を扱う。(3) ベクトルでは、平面上のベクトル及び空間におけるベクトルを扱う。これらの内容について、理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図りと示されている。このような活動を通して、学習の成果がより確かなものになるとともに、具体的な事象の考察に数学を活用しようとする態度が育成される。また、このことによって、社会生活における数学の有用性や意義を認識させることもできる。

(6) 数学活用

1. 数学活用は、従前の数学基礎の趣旨を生かし、その内容をさらに発展させた科目である。数学が文化と密接にかかわりながら発展してきたことを踏まえ、知識基盤社会において求められる事象を数理的に考察する能力や数学を積極的に活用する態度など、いわゆる数学的リテラシーを育てるため、(1) 数学と人間の活動と (2) 社会生活における数理的な考察の2つの内容で構成した。これらの内容は、数学的な見方や考え方、数学的な表現や処理、数学的活動やすることの楽しさなどに焦点を当て、具体的な事象の考察を通して数学のよさを認識できるようにするものである。指導に当たっては、この科目のねらいを十分達成できると考えられる教材を、生徒の実態や学習履歴などを踏まえて適切に取り上げることが大切である。また、他科目との履修順序が規定されていないことを踏まえ、必要に応じて他科目や他教科の内容に関連付けて扱うことも考えられる。

2. 目標は、数学と人間とのかかわりや数学の社会的有用性についての認識を深めるとともに、事象を数理的に考察する能力を養い、数学を積極的に活用する態度を育てる。数学と人間の活動では、記数法や測量などの数学史的な話題、数理的なゲームやパズルを取り上げ、数学が人間の活動にかかわってつくられ発展してきたことやその方法を理解させるとともに、数学と人間とのかかわりについての認識を深める。また、数学の社会的有用性についての認識を深めると示されている。社会生活における数理的な考察では、自動車の死角や内輪差、自動車や自転車の速度と制動距離の関係など身近な事象を取り上げ、それを数学化して考察し、交通安全にかかわる判断や説明をさせることなどを通して、数学の社会的有用性についての認識を深める。さらに、社会生活における数理的な考察では、イベント会場の順路や総当たり戦の試合進行、最短経路の探索などを考える際に、それらを、頂点と辺で構成される離散グラフに表し、能率的に処理したり、事象の様子を的確に伝えたりすることで、事象を数理的に考察する能力を高め、数学を積極的に活用する態度を育成する。

2. 5 理科

(1) 科学と人間生活

1. 科学と人間生活は、中学校理科で学習した内容を基礎として、自然に対する理解や科学技術の発展がこれまで私たちの日常生活や社会にいかに関与を与え、どのような役割を果たしてきたかについて、身近な事物・現象に関する観察、実験などを中心にして学び、科学的な

見方や考え方を養い、科学に対する興味・関心を高めていくという点に特色をもつ科目である。

2. 目標は、自然と人間生活とのかかわり及び科学技術が人間生活に果たしてきた役割について、身近な事物・現象に関する観察、実験などを通して理解させ、科学的な見方や考え方を養うとともに、科学に対する興味・関心を高めるとしている。この目標から、自然に対する理解や科学技術の発展が日常生活や社会に与えた影響と、それらが果たしてきた役割を学ぶ中で、科学的な見方や考え方を養い、科学に対する興味・関心を高めることにある。

(2) 物理基礎

1. 物理基礎は、中学校で学習した内容を基礎として、日常生活や社会との関連を図りながら物体の運動などの様々な物理現象やエネルギーへの関心を高め、観察、実験などを通して物理学的に探究する能力と態度を育てるとともに、物理学の基本的な概念や原理・法則、物理学の果たす役割を理解させ、科学的な見方や考え方を養う科目である。物理基礎の特徴は、日常生活や社会との関連を図りながら物理学が科学技術に果たす役割などについての認識を深めさせ、物体の運動など身近な物理現象やエネルギーに関する見方や考え方を養う内容で構成し、基礎的な素養を身に付けさせるようにしていることである。この物理基礎の履修によって、身近に見られる物理的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則を理解させ、物理学的な探究の方法を身に付けさせるようにするとともに、物理学と日常生活や社会とのかかわりを考えることができるようにすることが大切である。

2. 目標は、日常生活や社会との関連を図りながら物体の運動と様々なエネルギーへの関心を高め、意識をもって観察、実験などを行い、物理学的に探究する能力と態度を育てるとともに、物理学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養う。物理基礎の目標は、日常生活や社会との関連を図りながら物体の運動と様々なエネルギーへの関心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、物理学的に探究する能力と態度を育てるとともに、物理学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養うことである。科学的な見方や考え方を養うとあるのは、理科の基礎を付した科目共通の目標であり、物理基礎においては、身近に見られる物理現象の背後に原理・法則が存在することを理解し、それらを日常生活や社会の中で活用する能力と態度を養うことを示している。

(3) 物理

1. 物理は、物理基礎との関連を図りながら、さらに進んだ物理学的な方法で自然の事物・現象を取り扱い、観察、実験などを通して、物理学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。物理学の特徴は、できるだけ単純化した条件下で、自然の事物・現象について観察、実験を行い、観測・測定された量の間からより普遍的な法則を見だし、さらに、その法則から新しい事物・現象を予測したり、説明したりすることができることである。物理は、このような特徴をもった科目であるので、探究の過程を重視した指導を行い、生徒が興味・関心と探究心をもって自然の事物・現象を物理学的に考察する能力と態度を身に付けさせるよう

にすることが大切である。そうした学習の中で、幾つかの事物・現象が同一の概念によって説明できることを実感させたり、習得した概念や原理・法則を基に、その他の事物・現象の結果の予測や解釈をさせたりすることが重要である。

この物理の履修によって、物理学的に探究する能力と態度を身に付け、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、体系化された知識に基づいて自然の事物・現象を分析的、総合的に考察する能力を育成することが大切である。

2. 目標は、物理的な事物・現象に対する探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、物理学的に探究する能力と態度を育てるとともに、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成する。物理の目標は、高等学校理科の目標を受け、物理基礎の学習を踏まえて、物理的な事物・現象に対する関心や探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、物理学的に探究する能力と態度を育てるとともに、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成することである。

(4) 化学基礎

1. 化学基礎は、中学校で学習した内容を基礎として、日常生活や社会との関連を図りながら物質とその変化への関心を高め、観察、実験などを通して、化学的に探究する能力と態度を育てるとともに、化学の基本的な概念や原理・法則、化学の果たす役割を理解させ、科学的な見方や考え方を養う科目である。化学基礎の特徴は、物質が様々な場面で人間生活にかかわり、役立っていることを理解させるとともに、物質の構成や物質の変化に関する見方や考え方を養う内容で構成し、基礎的な素養を身に付けさせるようにしていることである。このため、生活を支える物質やその適切な使用など、日常生活や社会と関連する内容が含まれている。また、原子、分子、イオンなど物質を構成する粒子や化学結合、化学反応などを扱い、それらの事物・現象が物質の性質に関係するという考え方を基礎としている。化学基礎は、このような特徴をもった科目であるので、化学特有の考え方や化学的に探究する方法を学ばせるとともに、日常生活や社会で利用されている具体的な事例を取り上げて化学の果たす役割を理解させ、生徒の化学に対する興味・関心を高めるようにすることを重視している。この化学基礎の履修によって、物質に関する基本的な概念や原理・法則を理解させ、化学的に探究する方法を身に付けさせるようにするとともに、現代の生活を支える化学の役割や物質と人間生活とのかかわりについて考えさせることが大切である。

2. 化学基礎の目標は、日常生活や社会との関連を図りながら物質とその変化への関心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、化学的に探究する能力と態度を育てるとともに、化学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養う。化学基礎の目標は、日常生活や社会との関連を図りながら物質とその変化への関心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、化学的に探究する能力と態度を育てるとともに、化学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養うことである。化学基礎においては、身近な物質とその変化への関心を高め、生徒自らが見通しをもって主体的に観察、実験などに取り組むことにより、物質に関する原理・法則の基礎を理解し、物質とその変化を微視的にと

らえる見方や考え方を養うことを示している。

(5) 化学

1. 化学は、化学基礎との関連を図りながら、さらに進んだ化学的方法で自然の事物・現象に関する問題を取り扱い、観察、実験などを通して、化学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、化学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。化学は物質を対象とする科学であり、その特徴は、観察、実験を通して、物質の構造や性質、反応を調べることにより物質の特徴を理解し、物質に関する原理・法則を見いだすとともに、その知識を生かして物質を利用したり目的にかなった物質をつくり出したりすることにある。化学は、このような特徴を踏まえた科目であるので、観察、実験などを通して探究的な活動を行うことが極めて重要である。また、化学の概念や原理・法則といった抽象化された事項も、単に記憶するだけでなく、常に物質の示す具体的なふるまいと結び付けて理解させることが求められる。探究的な活動では、幾つかの事象が同一の概念によって説明できることや、事象の本質を突きつめていくことによって原理・法則に行きつくことを経験させることが大切である。また逆に、習得した概念や原理・法則を新しい事象の解釈に応用したり、物質の変化の結果を予測したりできるようにすることも大切である。この科目においては、物質やその変化に関する基本的な原理・法則を系統的に理解し、正しい物質観を身に付けさせ、他の科目の学習成果とも関連させて、自然界の事物・現象を分析的、総合的に考察する能力を育成することを示している。

2. 目標は、高等学校理科の目標を受け、化学基礎の学習を踏まえて、化学的な事物・現象に対する関心や探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、化学的に探究する能力と態度を育てるとともに、化学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成することである。物質とその変化について、化学的な解釈や説明ができることを通して、興味・関心を探究心にまで高め、知的好奇心をもって問題を見だし、主体的に解決しようとする意欲を高める。また、生徒自らが課題を見付け、考え、見通しをもって主体的かつ意欲的に観察、実験などに取り組むことを示している。さらに化学的な事物・現象の中から問題を見だし、観察、実験を中心に問題を解決していくという探究の過程をたどらせ、科学の方法を習得させ、化学的に探究する能力や態度を育てることを示している。化学的な事物・現象に関する基礎的な知識及び基本的な概念や原理・法則を深く、系統的に理解させることを示している。この科目においては、物質やその変化に関する基本的な原理・法則を系統的に理解し、正しい物質観を身に付けさせ、他の科目の学習成果とも関連させて、自然界の事物・現象を分析的、総合的に考察する能力を育成することを示している。

(6) 生物基礎

1. 生物基礎は、中学校で学習した内容を基礎として、日常生活や社会との関連を図りながら生物や生物現象への関心を高め、観察、実験などを通して、生物学的に探究する能力と態度を育てるとともに、生物学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方

を養う科目である。生物基礎の特徴は、生物や生物現象にかかわる基礎的な内容を扱い、身の回りの自然や日常生活や社会との関連性を意識しながら理解させ、基礎的な素養を身に付けさせるように意図していることである。また、生物や生物現象の理解を助けるため、共通性と多様性という視点を導入しているのも特徴である。

2. 目標は、日常生活や社会との関連を図りながら生物や生物現象への関心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、生物学的に探究する能力と態度を育てるとともに、生物学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養うとしている。この目標から、日常生活や社会との関連を図りながら生物や生物現象に対する関心を高め、目的意識をもって観察、実験を行い、生物学的に探究する能力と態度を育てるとともに、生物学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養うことである。科学的な見方や考え方を養うとあるのは、理科の基礎を付した科目共通の目標であり、生物基礎においては、身近な生物や生物現象への関心を高め、生徒自らがねらいを明確にした観察、実験などを行うことで、生物学的に探究する能力と態度を育てるとともに、生物や生物現象に関する概念や規則性を理解させ、生物や生物現象に関する科学的な見方や考え方を養うことを示している。

(7) 生物

1. 生物は、生物基礎との関連を図りながら、生物や生物現象をさらに広範に取り扱い、生物学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、生物学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。生物や生物現象の特徴は、共通性がみられると同時に多様性があること、多くの生物的・非生物的要因が互いに関与しており、しかも、それらの要因が有機的な関連をもって働いているということである。生物は、このような特徴を踏まえた科目であるので、生物基礎に引き続き共通性と多様性という視点を重視するとともに、生物と環境とのかかわりに注目することが重要である。また、季節や地域の実態などに応じて生物の素材を選び、生物や生物現象に対する探究心を高めさせるように配慮することが必要である。この生物の履修によって、生物と生物現象に関する基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、生物学的な探究の方法を身に付けさせるようにするとともに、生物や生物現象を分析的、総合的に考察する能力を育成することが大切である。

2. 目標は、生物や生物現象に対する探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、生物学的に探究する能力と態度を育てるとともに、生物学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成する。生物の目標は、高等学校理科の目標を受けて、生物や生物現象に対する関心や探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、生物学的に探究する能力と態度を育てるとともに、生物学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育成することである。この科目においては、生物や生物現象に関する基本的な概念や原理・法則などを系統的に理解し、他の科目の学習成果とも関連させて、生物や生物現象に関して探究する能力を身に付けさせ、自然界の事物・現象を分析的、総合的に考察する能力を育成することを示している。

(8) 地学基礎

1. 地学基礎は、中学校で学習した内容を基礎として、日常生活や社会との関連を図りながら地球や地球を取り巻く環境への関心を高め、観察、実験などを通して、地学的に探究する能力と態度を育てるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養う科目である。地学基礎の特徴は、地球環境の変化、日本の自然環境とその恩恵や災害など、日常生活や社会との関連を意識しながら地球や地球を取り巻く環境を理解させ、基礎的な素養を身に付けさせるように意図していることである。また、地学的な事物・現象のうち基礎となる内容を扱い、それらを一連の時間の流れの中でとらえていることも特徴である。地学基礎は、このような特徴をもった科目であるので、生徒に身の回りの地学的な事物・現象に関心をもたせ、主体的、積極的にかかわらせる中で、問題を見いだす力や科学的な思考力や表現力を育成させることが大切である。そのため、季節や地域の実態などに応じて野外観察の実施や、継続的な観察と記録、資料などの蓄積を行い、地球や地球を取り巻く環境に対する興味・関心を高めさせるように配慮することが必要である。この地学基礎の履修によって、地球や地球を取り巻く環境に関する基本的な概念や原理・法則を理解させ、地学的な探究の方法を身に付けさせるようにするとともに、地球の自然環境と日常生活や社会とのかかわりを考えることができるようにすることが大切である。

2. 目標は、日常生活や社会との関連を図りながら地球や地球を取り巻く環境への関心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、地学的に探究する能力と態度を育てるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養う。地学基礎の目標は、日常生活や社会と関連を図りながら地球や地球を取り巻く環境への関心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、地学的に探究する能力と態度を育てるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養うことである。地学基礎においては、上記のことを踏まえて地学の基本的な概念や原理・法則を理解させて、地学的な見方や考え方を養うことを示している。

(9) 地学

1. 地学は、地学基礎との関連を図りながら、さらに進んだ地学的な方法で自然の事物・現象を取り扱い、観察、実験などを通して地学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。地学的な事物・現象の特徴は、広大な空間の広がりや長大な時間の流れの中で、様々な形やエネルギーをもち、相互に関連しながら複雑に変化し続けているということである。地学は、このような特徴を踏まえた科目であるので、空間的・時間的スケールを正しく認識しつつ、他の事物・現象とのかかわりの中で総合的に考察することが重要である。また、実験室等で再現することが不可能な場合が多く、野外等における観測や調査から直接得られる事実を重視して、継続的な観測や記録などを行い、資料などを蓄積し、より正確に事物・現象を理解することが大切である。この地学の履修によって、地学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則の理解を深め、地学的な探究の方法を身に付けさせるようにするとともに、自然界の事物・

現象を分析的、総合的に考察する能力を育成することが大切である。

2. 目標は、地学的な事物・現象に対する探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、地学的に探究する能力と態度を育てるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成する。地学の目標は、高等学校理科の目標を受け、地学基礎の学習を踏まえて、地学的な事物・現象に対する関心や探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、地学的に探究する能力と態度を育てるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成することである。この科目においては、地学的な事物・現象に関する基本的な概念や原理・法則などを系統的に理解し、自然を探究する能力を身に付けさせ、他科目の学習成果とも関連させて、自然界の事物・現象を分析的、総合的に考察する能力を育成することを示している。

(10) 理科課題研究

1. 理科課題研究は、生徒自らが科学に関する課題を設定し、探究活動などで用いた探究の方法を活用して個人又はグループで研究を行わせ、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに、創造的な思考力を養うことを意図した科目である。理科課題研究は、高等学校理科で学習した基礎的・基本的な知識や技能を踏まえて、これらを活用して探究的な活動に取り組む科目であり、基礎を付した科目を一つ以上履修した上で履修することとしている。また、課題の特性や学校の実態に応じて、授業を特定の期間に集中して実施することも考えられる。

2. 目標は、科学に関する課題を設定し、観察、実験などを通して研究を行い、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに、創造性の基礎を培う。理科課題研究の目標は、高等学校における理科の学習の成果を踏まえ、生徒の興味・関心等に応じた科学に関する課題を設定し、観察、実験などを通して主体的に研究を行い、その過程において科学的に探究する能力と態度の育成を図るとともに、研究における創造性の基礎を培うことをねらいとすることを示している。

2. 6 保健体育

(1) 体育

1. 高等学校保健体育科では、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てるという教科の究極の目標の実現に向けて、体育においては、小学校から高等学校までの12年間の一貫した教育課程の中で、すべての児童生徒が学習する教科・科目としての最終段階の役割を担うこととなる。すなわち、体を動かすことを通して、心と体が一体であることや体力の高まりを実感したり技能を獲得したりするなどの過程を通して、合理的な運動の行い方や体力の高め方などの知識の重要性を認識させ、動きの獲得や技ができる喜びなどの各領域特有の特性や魅力を深く味わうとともに、公正、協力、責任、参画などの社会的態度を養い、スポーツの文化的価値などに対する理解を深め、現在及び将来の実生活、実社会で計画的、継続的に運動やスポーツを実践するための資質や能力をはぐくむ指導の充実が求められる。

2. 目標は、運動の合理的、計画的な実践を通して、知識を深めるとともに技能を高め、運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるようにし、自己の状況に応じて体力の向上を図る

能力を育て、公正、協力、責任、参画などに対する意欲を高め、健康・安全を確保して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとしている。この目標は保健体育科の目標を受け、これを体育としての立場から具体化したものであり、小学校、中学校及び高等学校 12 年間の一貫性を踏まえるとともに、特に中学校第 3 学年との接続を重視し、高等学校における体育の学習指導の方向を示したものである。

(2) 保健

1. 保健は、これらの健康・安全に関する基礎的・基本的な内容を生徒が体系的に学習することにより、健康問題を認識し、これを科学的に思考・判断し、適切に対処できるようにすることをねらいとしており、生涯を通じて健康で安全な生活を送るための基礎を培う上で中心的な役割を担っているものである。したがって、保健の指導に当たっては、ホームルーム活動や学校行事などの特別活動及び総合的な学習の時間などにおいて、保健で身に付けた知識及び資質や能力を生かして課題解決などに取り組むことができるようにする必要がある。そのためには、保健の指導を進める過程で、健康に関する興味・関心や課題解決への意欲を高めるとともに、知識を活用する学習活動を重視して、思考力・判断力等を育成することが重要である。

2. 目標は、個人及び社会生活における健康・安全について理解を深めるようにし、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てるとしている。この目標は、保健体育の目標を受けて、これを保健の立場から具体化し、学習指導の到達すべき方向を明らかにしたものである。

2. 7 芸術

(1) 音楽 I

1. 音楽 I は、高等学校において音楽を履修する生徒のために設けている最初の科目である。この科目は、中学校音楽科における学習を基礎にして、幅広い活動を展開し、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばすことなどをねらいとしており、音楽 II、音楽 III における発展的な学習の基礎を養う科目という性格を有している。そこで、中学校音楽科との関連を図り、芸術科としての音楽の内容を幅広く全体的に扱うこととし、特に、我が国や郷土の伝統音楽の学習を充実し、我が国及び諸外国の様々な音楽文化についての理解を深めていく学習を行うこととしている。

2. 目標は、芸術科の目標を受けて、音楽の幅広い活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深めるとしている。この目標は、次の 2 点について改善を図っている。1 点目は、音楽を愛好する心情に新しく生涯にわたりを加えた点である。2 点目は、音楽文化についての理解を深めることを新たに加えた点である。国際化が進んだ現代社会においては、我が国の伝統や文化の中に自分自身のよりどころを見いだすとともに、異なる文化などに対しても敬意を払い、世界の人々と共存することが求められている。そこで、我が国や諸外国の様々な音楽文化について、音楽 I では理解を深め、さらに音楽 II へ発展させ、音楽 III ではそれらを尊重する態度を育成していく必要がある。

(2) 音楽Ⅱ

1. 音楽Ⅱは、音楽Ⅰを履修した生徒が、さらに次の段階として履修するために設けている科目である。音楽Ⅱは、音楽Ⅰの学習を基礎にして、生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた活動を展開し、個性豊かな表現の能力と主体的な鑑賞の能力を伸ばすことなどをねらいとしている。そこで、音楽Ⅱでは、音楽Ⅰの学習経験を基盤として、個性豊かな表現の能力と主体的な鑑賞の能力を伸ばすため、A 表現については、(1) 歌唱、(2) 器楽又は(3) 創作のうち一つ以上を選択して扱うことができること、B 鑑賞については、我が国や郷土の伝統音楽を含む多様な音楽文化についての理解を深めていく観点から、適切かつ十分な授業時数を配当することとしている。

2. 目標は、芸術科の目標を受けるとともに、音楽Ⅰの目標との関連を考慮して、次のように示している。音楽の諸活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、個性豊かな表現の能力と主体的な鑑賞の能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深める。音楽Ⅰと同様、生涯学習社会の一層の進展に対応して、生涯にわたって音楽への永続的な愛好心をはぐくんでいくことを重視し、音楽を愛好する心情に新しく生涯にわたりを加えている。音楽Ⅰでの幅広い活動を踏まえ、音楽Ⅱでは、音楽の諸活動を通してと示し、A 表現について、(1) 歌唱、(2) 器楽又は(3) 創作のうち一つ以上を選択して扱うことができるようにしている。感性を高める趣旨については音楽Ⅰと同様であるが、感性は様々な環境の影響を受けながらはぐくまれ、生徒一人一人の個性が多様になることから、特に音楽Ⅱでは、個に応じた学習を充実し、感性的な認識を一層深めていくことが求められる。個性豊かな表現の能力を伸ばすためには、生徒自らが感性を働かせて思考・判断し、技能を高め、音楽を表現する場を設けることが重要となる。また、主体的な鑑賞の能力を伸ばすためには、生徒自らが主体的に音楽にかかわる鑑賞の学習を展開し、根拠をもって自分なりに批評する場を設けることが重要となる。音楽文化についての理解を深めることを、今回の改訂では目標文の最後に置いた。これは、表現と鑑賞の能力を伸ばすことが音楽文化の理解につながっていくことを重視したからである。文化的・歴史的背景などの広い視野をもって音楽に目を向けて、個性的、主体的な活動を充実し、音楽文化の理解を一層深めていく必要がある。

(3) 音楽Ⅲ

1. 音楽Ⅲは、音楽Ⅱを履修した生徒が、さらに次の段階として履修するために設けている科目である。音楽Ⅲは、音楽Ⅰ、Ⅱの学習を基礎にして、さらに生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた活動を展開し、個性豊かな音楽の能力を高めることなどをねらいとしている。そこで、音楽Ⅲでは、音楽Ⅰ、Ⅱの学習経験を基盤として、生徒の興味・関心、能力・適性等に応じた学習内容を設定し、一人一人の個別的な深化を図るため、A 表現の(1) 歌唱、(2) 器楽、(3) 創作又はB 鑑賞のうち一つ以上を選択して扱うことができること、また、いずれを選択した場合においても我が国や郷土の伝統音楽を含めるようにして、我が国や諸外国の様々な音楽文化を尊重する態度を育てることとしている。

2. 目標は、芸術科の目標を受けるとともに、音楽Ⅰ、Ⅱの目標との関連を考慮して、次

のように示している。音楽の諸活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情と音楽文化を尊重する態度を育てるとともに感性を磨き、個性豊かな音楽の能力を高める。音楽Ⅲの目標では、特に個性豊かな音楽の能力を高めることを強調している。このことは、音楽Ⅲが芸術科音楽における最終の科目であり、生徒一人一人の個性に応じた豊かな音楽の能力を身に付けさせることを目指しているからである。このため、生徒の特性等を考慮して、歌唱、器楽、創作、鑑賞のうち一つ以上を選択して扱うことができるとしている。今回の改訂で音楽Ⅰの目標に音楽文化についての理解を深めることを示した。音楽Ⅲでは、音楽Ⅰ、Ⅱの学習の上に立ち、音楽文化を尊重する態度を育てていく。感性を磨きと示したのは、音楽Ⅰ、Ⅱで高めた感性を、一層洗練させていくことを目指しているからである。個性豊かな音楽の能力を高めるためには、これまでに生徒が身に付けた表現や鑑賞の能力を基盤として、それをさらに高めながら、音楽に対してより深くかかわっていきこうとする意欲をもって取り組み、それぞれの個性に応じた豊かな音楽観を形成できるようにすることが大切である。一人一人に応じた多様な活動を設定するなどして、学習の深化を図っていく必要がある。

(4) 美術Ⅰ

1. 美術Ⅰは、高等学校において美術を履修する生徒のために設けている最初の科目であり、中学校美術科における学習を基礎にして、A 表現及び B 鑑賞についての幅広い活動を展開し、美術を愛好する心情を育て、美術の諸能力を伸ばし、美術文化の理解を図ることなどをねらいとしており、美術Ⅱ、Ⅲにおける発展的な学習の基礎を養う科目という性格を有している。

2. 目標は、芸術科の目標を受けて、次のように示している。美術の幅広い創造活動を通して、美的体験を豊かにし、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし、美術文化についての理解を深めるとしている。この目標は、次の2点について改善を図っている。1点目は、美術を愛好する心情に新しく生涯にわたりを加えた点である。2点目は、美術文化についての理解を深めることを新たに加えた点である。これらの改善点を踏まえて、美術は、感じ取ったことや考えたこと、目的、機能などを基に主題を生成し創造的な表現の構想を練り、意図に応じて材料や用具の特性を生かして表現することや、美術作品などを様々な観点から鑑賞して、自然や社会と美術との関係、日本及び諸外国の美術文化などを理解することをねらいとしている。

(5) 美術Ⅱ

1. 美術Ⅱは、美術Ⅰを履修した生徒が、さらに次の段階として履修するために設けている科目である。美術Ⅱは、美術Ⅰの学習を基礎にして、生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた活動を展開し、美術の諸能力を伸ばすことなどをねらいとしている。今回の改訂では、豊かな美的体験を通して実感をもって美術についての理解を深めることを重視した。そのため、美術Ⅱでは、従前は表現領域の各分野と鑑賞領域のいずれかを選択して学習できることとしていたが、表現領域のいずれか一つ以上の分野と鑑賞領域を学習するように改めた。

2. 美術Ⅱの目標は、芸術科の目標を受けるとともに、美術Ⅰの目標との関連を考慮して、

次のように示している。美術の創造的な諸活動を通して、美的体験を豊かにし、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、個性豊かな表現と鑑賞の能力を伸ばし、美術文化についての理解を深める。美術Ⅰと同様、生涯学習社会の一層の進展に対応して、生涯にわたって美術への永続的な愛好心をはぐくんでいくことを重視し、美術を愛好する心情に新しく生涯にわたりを加えている。美術Ⅱは、美術Ⅰにおける幅広い美的体験の上に立ち、創造的な美術の諸活動を通して、自然や自己、社会などを深く見つめ表現する能力や、美術作品を多様な視点から分析し理解したり、心豊かな生き方にかかわる美術の働きを理解したりするなどの鑑賞の能力を伸ばすことをねらいとしている。美術が心豊かな生き方を実現するために役立っていることに気付くとともに、よりよいものを生み出そうとする自覚を高め、美術の社会における役割、また、日本及び諸外国の美術文化についての理解を深めることが大切である。個性豊かな表現と鑑賞の能力とは、美的直観力や柔軟な思考力、判断力等を身に付け、自己の価値意識を基にした創造的な表現や鑑賞の能力のことを示している。表現と鑑賞の範囲を広げ、多様な視点から学習を深め、自己の主体的な考えや判断をより普遍的な視野から表現と鑑賞の活動に生かすことが必要である。

(6) 美術Ⅲ

1. 美術Ⅲは、美術Ⅱを履修した生徒が、さらに次の段階として履修するために設けている科目である。美術Ⅲは、美術Ⅰ、Ⅱの学習を基礎にして、さらに生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた活動を展開し、美術の諸能力を高めることなどをねらいとしている。そのため、従前と同様に、表現領域の各分野及び鑑賞領域から一つ以上を選択して学習することとしている。また将来、美術を専門的に学び職業生活に生かそうとする生徒に対して、より質の高い学習内容を提供することについても配慮する必要がある。

2. 目標は、芸術科の目標を受けるとともに、美術Ⅰ、Ⅱの目標との関連を考慮して、次のように示している。美術の創造的な諸活動を通して、美的体験を豊かにし、生涯にわたり美術を愛好する心情と美術文化を尊重する態度を育てるとともに、感性と美意識を磨き、個性豊かな美術の能力を高める。目標については、美的体験を豊かにしを新たに加えた。美術Ⅲでは、生徒の能力・適性、興味・関心を重視し、特定の分野のみを選択して学習することができることとしている。美術Ⅲは、生徒の特性や美意識、知識・技能を發揮した主体的・創造的な諸活動を通して、創造の喜びを一層深く味わい、美術を生活に生かすなど、生涯にわたって美術を愛好する心情と美術文化を尊重する態度を育てるとともに、独創的で個性的な表現と鑑賞の能力を高めることをねらいとしている。美術文化を尊重する態度は、日本の美術をはじめとして、時代や民族、国などの違いを越えて価値を共有する美術文化を尊重し継承していく態度を意味し、我が国の伝統と文化に自信と誇りをもって国際社会の一員として生きていく豊かな判断力や行動力の育成を目指すものである。自ら制作したり様々な美術作品や文化財に触れたりして、美術を学ぶ楽しさ、美や創造を探究する心をはぐくむとともに、美術の社会的な価値を認識することを通して、自己の生き方を追求し、創造的に心豊かに生きる力を培うことが大切である。感性と美意識を磨きとは、美と創造を求める心を通して自己の価値観を問い直し、新しい発見

などを引き出し、それらを通して、より豊かな感性をはぐくみ、美意識を高めさせることである。さらに、映像メディアなどを活用して美術を愛好する場を共有したり、地域の文化財や美術館などを活用したりして、美しいものを大切な価値として求めようとする態度をはぐくむことが必要である。

(7) 工芸 I

1. 工芸 I は、高等学校において工芸を履修する生徒のために設けている最初の科目である。工芸 I は、中学校美術科における学習を基礎にして、A 表現及び B 鑑賞についての幅広い活動を展開し、工芸を愛好する心情を育て、工芸の諸能力を伸ばし、工芸の伝統と文化の理解を図ることなどをねらいとしており、工芸 II、III における発展的な学習の基礎を養う科目という性格を有している。A 表現は、(1) 身近な生活と工芸と (2) 社会と工芸の二つの分野で構成している。(1) 身近な生活と工芸は、自己の身近な生活に目を向け、自己の思いなどから発想し、制作する人の視点に立って創意工夫して表現する能力を育成することをねらいとしている。(2) 社会と工芸は、使用する人や場などを考え発想し、社会的な視点に立って創意工夫して表現する能力を育成することをねらいとしている。B 鑑賞は、主体的、積極的に作品などからよさや美しさを感じ取り、批評し合うなどして幅の広い見方を獲得するとともに、日本の工芸の特質や、工芸の伝統と文化についての理解を深めることを重視している。

2. 目標は、芸術科の目標を受けて、次のように示している。工芸の幅広い創造活動を通して、美的体験を豊かにし、生涯にわたり工芸を愛好する心情と生活を心豊かにするために工夫する態度を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし、工芸の伝統と文化についての理解を深める。目標は、次の 2 点について改善を図っている。1 点目は、工芸を愛好する心情に新しく生涯にわたりを加えた点である。2 点目は工芸の伝統と文化についての理解を深めることを新たに加えた点である。これらの改善点を踏まえて、工芸 I は、自己の思いや使う人の願いなどを考えて心豊かな発想をし、意図に応じて材料や用具を活用し、創意工夫して制作することや、工芸作品などを様々な観点から鑑賞して、自然や社会と工芸との関係や生活の中の工芸の働き、日本の工芸の伝統と文化などを理解することをねらいとしている。

(8) 工芸 II

1. 工芸 II は、工芸 I を履修した生徒が、さらに次の段階として履修するために設けている科目である。工芸 II は、工芸 I の学習を基礎にして、生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた活動を展開し、工芸の諸能力を伸ばすことなどをねらいとしている。今回の改訂では、豊かな美的体験を通して実感をもって工芸についての理解を深めることを重視した。そのため、工芸 II では、従前は表現領域の各分野と鑑賞領域のいずれかを選択して学習できることとしていたが、表現領域のいずれか一つ以上の分野と鑑賞領域を学習するように改めた。

2. 目標は、芸術科の目標を受けるとともに、工芸 I の目標との関連を考慮して、次のように示している。工芸の創造的な諸活動を通して、美的体験を豊かにし、生涯にわたり工芸を愛好する心情と生活を心豊かにするために工夫する態度を育てるとともに、感性を高め、個性

豊かな表現と鑑賞の能力を伸ばし、工芸の伝統と文化についての理解を深める。工芸Ⅰと同様、生涯学習社会の一層の進展に対応して、生涯にわたって工芸への永続的な愛好心をはぐくんでいくことを重視し、工芸を愛好する心情に新しく生涯にわたりを加えている。工芸Ⅱは、工芸Ⅰにおける幅広い美的体験の上に立ち、創造的な工芸の諸活動を通して、自己の体験や夢、社会における有用性などを考え、表現する能力や、工芸作品を多様な視点から分析し理解したり、生活環境の改善や心豊かな生き方にかかわる工芸の働きを理解したりするなどの鑑賞の能力を伸ばすことをねらいとしている。

(9) 工芸Ⅲ

1. 工芸Ⅲは、工芸Ⅱを履修した生徒が、さらに次の段階として履修するために設けている科目である。工芸Ⅲは、工芸Ⅰ、Ⅱの学習を基礎にして、さらに生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた活動を展開し、工芸の諸能力を高めることなどをねらいとしている。そのため、従前と同様に、表現領域の各分野及び鑑賞領域から一つ以上を選択して学習することとしている。また、将来、工芸を専門的に学び職業生活に生かそうとする生徒に対して、より質の高い学習内容を提供することについても配慮する必要がある。

2. 目標は、芸術科の目標を受けるとともに、工芸Ⅰ、工芸Ⅱの目標との関連を考慮して、次のように示している。工芸の創造的な諸活動を通して、美的体験を豊かにし、生涯にわたり工芸を愛好する心情と工芸の伝統と文化を尊重する態度を育てるとともに、感性と美意識を磨き、個性豊かな工芸の能力を高める。目標については美的体験を豊かにしを新たに加えた。工芸Ⅲでは、生徒の能力・適性、興味・関心を重視し、特定の分野のみを選択して学習することができる。その際、特定の分野の学習であっても、美的感受性、創造性、人間理解、研究心などをはぐくむ美的体験を豊かにすることが重要であるため、工芸Ⅲの目標にも明記した。工芸Ⅲは、生徒の特性や美意識、知識・技能を發揮した主体的・創造的な諸活動を通して、創造の喜びを一層深く味わい、工芸を生活に生かすなど、生涯にわたって工芸を愛好する心情と工芸の伝統と文化を尊重する態度を育てるとともに、制作を確かなものとする技術・技法や独創的で個性的な表現と鑑賞の能力を高めることをねらいとしている。さらに、創造的な活動を通して、人間とももののかかわりを見つめ、工芸の学習経験等を生かして自己の生活をよりよく改善したり、心豊かな社会の形成に積極的に寄与したりするなどし、美しいものを大切な価値として求めようとする態度をはぐくむことが必要である。

(10) 書道Ⅰ

1. 書道Ⅰは、高等学校において書道を履修する生徒のために設けている最初の科目である。この科目は、中学校国語科の書写における学習を基礎にして、A 表現の(1) 漢字仮名交じりの書、(2) 漢字の書、(3) 仮名の書及び B 鑑賞についての幅広い活動を展開し、芸術としての書の表現と鑑賞の基礎的な能力を伸ばすことなどをねらいとしており、書道Ⅱ、書道Ⅲにおける発展的な学習の基礎を養う科目という性格を有している。

2. 目標は、芸術科の目標を受けて、書道の幅広い活動を通して、生涯にわたり書を愛好

する心情を育てるとともに、感性を高め、書写能力の向上を図り、表現と鑑賞の基礎的な能力を伸ばし、書の伝統と文化についての理解を深めるとしている。この目標は、次の3点について改善を図っている。1点目は、書を愛好する心情に新しく生涯にわたりを加えた点である。2点目は、書の伝統と文化についての理解を深めることを新たに加えた点である。3点目は、中学校国語科の書写からの接続と芸術科の目標を踏まえ、感性を高め、書写能力の向上を図りと改めた点である。書道Ⅰで理解を深め、書道Ⅱでさらに発展させ、書道Ⅲで伝統と文化を尊重する態度を育てることとしている。

(11) 書道Ⅱ

1. 書道Ⅱは、書道Ⅰを履修した生徒が、さらに次の段階として履修するために設けている科目である。書道Ⅱは書道Ⅰの学習を基礎にして、生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた活動を展開し、個性豊かな表現と鑑賞の能力を伸ばすことなどをねらいとしている。従前では、A表現の三つの分野のうち一つ以上を選択して扱うことができていたが、今回の改訂では、(1) 漢字仮名交じりの書について、その内容を一層深める観点から必ず扱うものとし、(2) 漢字の書及び(3) 仮名の書については、生徒の特性、地域や学校の実態を考慮し、いずれか一つ以上を選択して扱うことができるようにしている。書道Ⅱにおいては、書道Ⅰの学習を踏まえ、生徒の興味・関心、能力・適性等に応じた発展的な学習が可能となるようにしている。

2. 目標は、芸術科の目標を受けるとともに、書道Ⅰの目標との関連を考慮して、次のように示している。書道の創造的な諸活動を通して、生涯にわたり書を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、個性豊かな表現と鑑賞の能力を伸ばし、書の伝統と文化についての理解を深める。書道Ⅱでは、書道Ⅰと同様、生涯学習社会の一層の進展に対応して、生涯にわたって書への永続的な愛好心をはぐくんでいくことを重視し、書を愛好する心情に新しく生涯にわたりを加えている。書道Ⅱにおいては、表現と鑑賞の関連を有機的に図りながら、書道Ⅰをさらに発展させ、学習に意欲的に取り組み、書を理解しながら自ら問題解決できる主体的な活動を展開することができるようにしている。書道Ⅱにおいては、古典の書を臨書したり創作したりすることを通して、幅広い書の表現理論と技法を習得するとともに、それらの中から自己の適性を見いだすことが可能となる。書の伝統と文化についての理解を深めるは書道Ⅰと同様であるが、書道ⅠのB鑑賞の日本及び中国等の文字と書の伝統と文化の内容を一層発展させ、生徒の知的関心を一層高め、理解の深化を図ることが重要である。

(12) 書道Ⅲ

1. 書道Ⅲは、書道Ⅱを履修した生徒が、さらに次の段階として履修するために設けている科目である。書道Ⅲは、書道Ⅰ、Ⅱの学習を基礎にして、さらに生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた活動を展開し、個性豊かな書の能力を高めることなどをねらいとしている。従前と同様に、A表現の(1) 漢字仮名交じりの書、(2) 漢字の書、(3) 仮名の書及びB鑑賞のうち一つ以上を選択して扱うことができるようにしている。書道Ⅲにおいては、書道Ⅰ、Ⅱの学習を踏まえ、さらに生徒の興味・関心、能力・適性等に応じた発展的な学習が可能となるよ

うにしている。

2. 目標は、芸術科の目標を受けるとともに、書道Ⅰ、Ⅱの目標との関連を考慮して、次のように示している。書道の創造的な諸活動を通して、生涯にわたり書を愛好する心情と書の伝統と文化を尊重する態度を育てるとともに、感性を磨き、個性豊かな書の高める。書道の創造的な諸活動を通してについては、A 表現または B 鑑賞の学習を通して、生徒の興味・関心、能力・適性等に応じたさらに進んだ学習を展開することを意味している。書道Ⅲでは、書の伝統と文化を尊重する態度を育てることを目標として示している。また、感性を磨きと示したのは、書道Ⅰ、Ⅱで高めた感性をより一層洗練させていくことを目指したものである。個性豊かな書の高めるについては、書道Ⅰ、Ⅱの学習を踏まえて、生徒一人一人の個性に応じた豊かな書の高めていくことをねらいとして示したものである。書道Ⅲでは、書道Ⅰ、Ⅱの学習の上に立ち、さらに書の伝統と文化を尊重する態度を育てていくこととしている。

2. 8 外国語

(1) コミュニケーション英語基礎

1. コミュニケーション英語基礎は、中学校で学習した英語の定着を図ることで、高等学校外国語科において英語を履修する場合、すべての生徒に履修させる科目であるコミュニケーション英語Ⅰでの学習に円滑に移行できる力を養うために設定されたものである。

2. 目標は、英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な能力を養う。コミュニケーション英語基礎の目標は、次の二つの要素から成り立っている。① 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。② 英語を通じて、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な能力を養うこと。①については、外国語科の目標に準ずる。②は、生徒がコミュニケーション英語Ⅰでの学習に円滑に移行できるように、中学校における学習内容を十分に定着させ、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことという4技能の基礎を固めることを意味する。実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用する機会をもつことによって、中学校までの基礎的な学習内容を定着させるための指導を行うことが基本であり、詳細な文法の説明等に偏ることのないように留意する。また、高等学校における外国語科の学習への動機を与える指導を行うことにも配慮する。

(2) コミュニケーション英語Ⅰ

1. コミュニケーション英語Ⅰは、高等学校外国語科で英語を履修する場合、すべての生徒に履修させる科目であり、中学校における英語や高等学校におけるコミュニケーション英語基礎の学習を踏まえ、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養うために設定されたものである。

2. 目標は、英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養うとしている。この目標は、次の二つの要素から成り立っている。① 英語を通じて、積極的にコミュ

コミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。② 英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養うこと。基礎的な能力を養うとあるのは、この科目が中学校における英語や高等学校におけるコミュニケーション英語基礎の学習を基礎に、比較的平易な内容を学習させ、高等学校における英語の学習の基礎を培うことをねらいとしているからである。

(3) コミュニケーション英語Ⅱ

1. コミュニケーション英語Ⅱは、すべての生徒に履修させる科目であるコミュニケーション英語Ⅰの学習を踏まえ、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を伸ばすように設定されたものである。

2. 目標は、英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を伸ばすことである。この目標は、次の二つの要素から成り立っている。① 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。② 英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を伸ばすこと。

(4) コミュニケーション英語Ⅲ

1. コミュニケーション英語Ⅲは、コミュニケーション英語Ⅱの学習を踏まえ、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力をさらに伸ばし、実際の社会生活において活用できる英語の能力を身に付けられるように設定されたものである。

2. 目標は、英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力をさらに伸ばし、社会生活において活用できるようにする。次の二つの要素から成り立っている。① 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。② 英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力をさらに伸ばし、社会生活において活用できるようにすること。①については、外国語科の目標に準ずる。②はコミュニケーション英語Ⅱで伸ばした能力をさらに伸ばし、社会生活において活用できる力を身に付けさせることを意味する。社会生活において活用できるとは、高等学校卒業後に就く仕事や、高等教育機関での学習・研究、その他様々な生活の場面において、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を生かすことができるということである。

(5) 英語表現Ⅰ

1. 英語表現Ⅰは、高等学校の外国語科の選択科目の一つとして、情報や考えなどを伝える能力を養うために設定されたものである。

2. 目標は、英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養うとしている。この目標は、次の二つの要素から成り立っている。① 英語を

通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。② 英語を通じて、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養うこと。以上の2点から構成されている。

(6) 英語表現Ⅱ

1. 英語表現Ⅱは、英語表現Ⅰの学習を踏まえ、英語による表現力を伸ばすように設定されたものである。

2. 目標は、英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばす。次の二つの要素から成り立っている。① 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。② 英語を通じて、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばすこと。①については、外国語科の目標に準ずる。②は、英語表現Ⅱでは、英語表現Ⅰで養った能力を伸ばすことを意味する。

(7) 英語会話

1. 英語会話は、中学校の英語の学習を踏まえ、その基礎の上に英語会話の学習を展開するように設定された選択科目である。

2. 目標は、英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、身近な話題について会話する能力を養うとしている。この目標は、次の二つの要素から成り立っている。① 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。② 英語を通じて、身近な話題について会話する能力を養うこと。身近な話題とは、家庭生活、学校生活、社会生活などの日常的な場面で、生徒どうしで話をする際、又は生徒が様々な社会的立場の人と話をする際の話題のことであり、生徒自身や家族に関すること、生徒の興味・関心の対象となること、社会生活で必要なことなどである。

2. 9 家庭

(1) 家庭基礎

1. 家庭基礎は、少子高齢化への対応や持続可能な社会の構築、食育の推進、男女共同参画社会の推進等を踏まえて、自立して生活する能力と異なる世代とかわり共に生きる力を育てることを重視している。従前の家庭基礎の内容を再構成し、人の一生を見通し、衣食住生活についての科学的な理解を深めるとともに、生涯の生活設計の学習を通して、生涯にわたってこれらの能力を活用して課題を解決できるよう改善を図った。

2. 目標は、人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。家庭基礎は、家族や生活の営みを人の一生とのかかわりの中でとらえ、家族や家庭生活の在り方、子どもと高齢者の生活と福祉、生活の自立と

健康のための衣食住、消費生活と環境などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、男女が協力して家庭や地域の生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てることをねらいとしている。そのためには、生活をする上での様々な課題を主体的に解決する能力の育成を目指して、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動を充実することが重要である。今回の改訂においては、人の一生を時間軸としてとらえるとともに、生活の営みに必要な金銭、生活時間、人間関係などの生活資源や、衣食住、保育、消費などの生活活動にかかわる事柄を人の一生とのかかわりの中で空間軸としてとらえ、家庭科の学習を生徒自身の問題として考えさせることを一層重視している。すなわち、人の一生を見通しながら生活資源や生活活動について学習することを通して、青年期を起点として自分の生き方を考えさせ、子どもや高齢者などの異なる世代とのかかわり共に生きる力、持続可能な社会の構築を目指して健康や環境に配慮しながら自立して生活する能力を育成し、男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度の育成を目指している。

(2) 家庭総合

1. 家庭総合は、少子高齢化への対応や持続可能な社会の構築、食育の推進、男女共同参画社会の推進等を踏まえて、家族や家庭の生活の営みを人の一生とのかかわりの中で総合的にとらえ、家庭や地域の生活をマネジメントする能力を育てることを重視している。従前の家庭総合を基に、生活の科学と環境、子どもや高齢者とのかかわりと福祉、生活における経済の計画と消費などの内容の充実を図った。

2. 目標は、人の一生と家族・家庭、子どもや高齢者とのかかわりと福祉、消費生活、衣食住などに関する知識と技術を総合的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てるとしている。この科目は、家族や生活の営みを人の一生とのかかわりの中でとらえ、人の一生と家族・家庭、子どもや高齢者とのかかわりと福祉、生活における経済の計画と消費、生活の科学と環境、生涯の生活設計などに関する知識と技術を、断片的に習得させるのではなく、生涯を見通しながら、実際の生活の場で生きて働く力となるよう総合的に習得させ、男女が協力して家庭や地域の生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てることをねらいとしている。今回の改訂においては、人の一生を時間軸としてとらえるとともに、生活の営みに必要な金銭、生活時間、人間関係などの生活資源や、衣食住、保育、消費などの生活活動にかかわる事柄を、人の一生とのかかわりの中で空間軸としてとらえ、家庭科の学習を生徒自身の問題としてとらえさせることを一層重視している。

(3) 生活デザイン

1. 生活デザインは、少子高齢化への対応や持続可能な社会の構築、食育の推進、男女共同参画社会の推進等を踏まえて生活の文化的な意味や価値への理解を深め、将来の生活を設計し創造する能力を育てることを重視している。従前の生活技術から名称を改めた。科目名生活デザインのデザインには、人がよりよい価値に向かって行動するために計画し、考えるという

意味をもたせており、生活の価値や質を高め、豊かな生活を楽しみ味わいつくる実践力を育成することを重視している。

2. 目標は、人の一生と家族・家庭及び福祉、消費生活、衣食住などに関する知識と技術を体験的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。生活デザインは、家族や生活の営みを人の一生とのかかわりの中でとらえ、人の一生と家族・家庭及び福祉、消費生活と環境、衣食住などに関する知識や技術を生活の中で実際に活用できるよう体験的に習得させ、男女が協力して家庭や地域の生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てることをねらいとしている。今回の改訂においては、人の一生を時間軸としてとらえるとともに、生活の営みに必要な金銭、生活時間、人間関係などの生活資源や、衣食住、保育、消費などの生活活動にかかわる事柄を人の一生とのかかわりの中で空間軸としてとらえ、家庭科の学習を生徒自身の問題としてとらえさせることを一層重視している。すなわち、人の一生を見通しながら生活資源や生活活動について学習することを通して、青年期を起点に自分の生き方を考えさせ、子どもや高齢者などの異なる世代とのかかわり共に生きる力、持続可能な社会の構築を目指して健康や環境に配慮しながら具体的な事例や体験的な学習を通して衣食住、消費などの生活を創造する能力と実践的な態度の育成を目指している。

2. 10 情報

(1) 社会と情報

1. 社会と情報は、情報社会に積極的に参画する態度を育てることである。その際、情報を適切に活用し表現する視点から情報の特徴や情報社会の課題について、情報モラルや望ましい情報社会の構築の視点から情報化が社会に及ぼす影響について理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行うために必要な基礎的な知識と技能を習得させることもねらいとしている。

2. 目標は、情報の特徴と情報化が社会に及ぼす影響を理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てる。

社会と情報では、共通教科情報科が育成することを旨とする社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を情報社会に積極的に参画する能力と態度ととらえている。情報化の進展が社会に及ぼす影響や個人の責任などの面から情報社会の特性や在り方を考えさせ、情報通信ネットワーク上のルールやマナー、情報の安全性などに関する基礎的な知識や技能を習得させる。情報とメディアの特徴、情報のデジタル化の仕組み、情報手段の基本的な仕組みなどについて理解させる。コミュニケーション手段の発達をその変遷と関連付けながら理解させるとともに、情報通信ネットワークの特性を踏まえ、情報の受発信時に配慮すべき事項などについて理解させる。なお、この科目の内容は情報社会に参画する態度の育成に重点を置いた構成になっているが、他の観点についても同様に学ぶ内容となっていることに特に留意する。

(2) 情報の科学

1. 情報の科学は、情報社会の発展に主体的に寄与する能力と態度を育てることである。その際、情報技術の面から情報社会を考えさせたり、情報社会を進展させるために社会のニーズに対応した情報技術の開発や改善が必要であることを考えさせたりするなどして、情報社会を支える情報技術の役割や影響を理解させ、情報と情報技術に関する基礎的な知識と技能の習得を通して問題の発見と解決に効果的に活用するための科学的な考え方を習得させることもねらいとしている。

2. 目標は、情報社会を支える情報技術の役割や影響を理解させるとともに、情報と情報技術を問題の発見と解決に効果的に活用するための科学的な考え方を習得させ、情報社会の発展に主体的に寄与する能力と態度を育てる。情報の科学では、共通教科情報科が育成することを旨とする社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を情報社会の発展に主体的に寄与する能力と態度ととらえている。このことは、情報社会の発展に役立つことを自ら進んで行い、よりよい情報社会にするために貢献できる能力・態度のことである。なお、この科目の内容は情報の科学的な理解の育成に重点を置いた構成になっているが、他の観点も学ぶ内容となっていることに特に留意する。

2. 11 総合的な学習の時間

1. 総合的な学習の時間は、学校教育法施行規則第 83 条において定められ、各学校における教育課程上必置とされている。今回の改訂では、総合的な学習の時間の教育課程における位置付けを明確にし、各学校における指導の充実を図るため、総合的な学習の時間の目標、内容、内容の取扱いについて、総合的な学習の時間の単位数についても述べている。総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとすることから、思考力・判断力・表現力等が求められる知識基盤社会の時代においてますます重要な役割を果たすものである。さらに、総合的な学習の時間の特質や目指すところを目標として示し、この時間において育成する生徒の資質や能力及び態度を明確にした。

2. 目標は、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする。今回の改訂では、総合的な学習の時間の目標を新たに設定した。従前の総則に示されていた総合的な学習の時間のねらいを踏まえて、新たに国の示す基準として目標を定めたのは、各学校において創意工夫を生かした特色ある教育活動を引き続き行うとともに、この時間を通して実現することが求められる目標を明確にするためである。

よって、総合的な学習の時間の目標は、(1) 横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すこと (2) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること (3) 学び方やものの考え方を身に付けること (4) 問題の解決

や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること (5) 自己の在り方生き方を考えることができるようにすることという 5 つの要素から構成されている。

2. 12 商業高等学校における教育課程の例

共通科目を前節まで述べてきたが、その履修内容について愛知県立岡崎商業高等学校を事例として以下みていきたい。

表 2-1 によれば、1 年生は国語総合 4 単位、現代社会 2 単位、数学 I 3 単位、体育 2 単位、保健 1 単位、芸術は、音楽 I、美術 I、書道 2 単位から選択、コミュニケーション英語 I 3 単位、ホームルーム 1 単位を履修していることが確認できる。

2 年生は現代文 B 2 単位、世界史 A 2 単位、数学 A 2 単位、科学と人間生活 2 単位、体育 2 単位、保健 1 単位、コミュニケーション英語 II 2 単位、英語会話 2 単位、家庭総合 2 単位、ホームルーム 1 単位である。専門 4 コースに分かれたが、各専門学科ともに同じ共通科目を履修していることが分かる。

表 2-1 専門学科 (商業) における共通科目の履修内容 : 愛知県立岡崎商業高等学校の例

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
一年次	全員共通	国語総合				現代社会		数学 I			体育		保健	音楽 I	コミュニケーション英語 I				LT					
														美術 I										
														書道 I										
二年次	総合ビジネス	現代文 B	世界史 A	数学 A	科学と人間生活	体育	保健	コミュニケーション英語 II	英語会話	家庭総合	LT													
	国際ビジネス																							
	情報会計																							
	情報処理																							
三年次	総合ビジネス	現代文 B	日本史 A	数学 II	生物基礎	体育	コミュニケーション英語 II	家庭総合	LT															
	国際ビジネス																							
	★進学コース									国語表現		英語表現 I		LT										
	情報会計																							
	情報処理																							

出所 : 愛知県立岡崎商業高等学校 SHOOOL GUIDE 2021 PP1-2 を参考に作成した。

3 年生では、2 年生の 4 科を基本にしなから、国際ビジネス科の中に進学コースが置かれ、4 科 1 コースとなった。4 科 1 コースの共通する履修科目を見ると、現代文 B 2 単位、日本史 A 2 単位、数学 II 3 単位、生物基礎 2 単位、体育 3 単位、コミュニケーション英語 II 3 単位、家庭総合 2 単位、ホームルーム 1 単位である。進学コースは国語表現 2 単位、英語表現 I 2 単位が追加されている。

以上に、表にて履修科目を確認したが、商業高等学校の共通科目の履修内容は同一ではなく、それぞれの商業高等学校にて特色があるという。とりわけ、地理歴史、公民、理科、家庭の履修科目が異なるようである。

愛知県立岡崎商業高等学校では、地理歴史科目は、2 年生世界史 A、3 年生日本史 A を、公民科目は、1 年生現代社会を、理科科目は、2 年生科学と人間生活、3 年生生物基礎を、それぞれ履修している。また、家庭科目は、家庭総合を 2、3 年次に置き、2 年食物、3 年被服を

中心として学び、計4単位としている。共通科目においても、それぞれ限られた時間の中で学び、将来に活かせるように、工夫しているものと読み取れる。

ところで、必修科目共通科目である情報科と総合的な学習の時間は表2-1から見出すことはできないが、商業高等学校では、情報科のうち社会と情報は専門科目情報処理⁵、総合的な学習の時間は専門科目課題研究⁶に代替できる。

3. グランドデザインの構築

平成29(2017)年公表の小学校・中学校学習指導要領(解説総則編)では、社会に開かれた教育課程の理念に基づき、めざすべき教育の在り方を家庭や地域と共有し、その連携及び協働のもとに教育課程の編成についての基本的な方針を家庭や地域とも共有していくことが示されている。そのため、愛知県立岡崎商業高等学校(以下、本校とする)においては、教育目標に照らしながら各教科等の授業のねらいを改善したり、教育課程の実施状況を評価したりすることが可能となるよう、教育目標の達成に向けて具体的な取組を示すことにした。令和2(2020)年度、校訓や学校目標から育てたい生徒像として即戦力となる社会人を育成すると掲げた。即戦力となる社会人を育成するために、表3-1に示したグランドデザインを構築し目標達成を目指すこととした。教職員は、学校のあるべき姿を思い描きながら、生徒たちの学習、学校行事、部活動などが補完し合い成長できるような構図をイメージした。何ができるようになるか、何を教えるか、どのように教えるか、段階的に取り組むことが学校力の向上につながると考え、以下のような項目のねらいを教職員で共有し教育活動で活用していくことにした。

(1) 育てたい生徒像

本校は、明治35(1902)年7月に創立し、令和2(2020)年118年目を迎える商業高校である。近年、高校卒業後の進路の傾向は、就職5割、進学5割前後である。就職を主軸に置いてきた商業高校は大きく変容してきている。誰もが将来、働くことを義務付けられていることから、社会人にとって必要な資質や能力を備えることが重要であると考えた。本校では、育てたい生徒像として即戦力となる社会人を育成することと位置付けた。

(2) 身に付けたい資質・能力

様々な企業の理念や目標を貫徹するためには、人間力、適応力、コミュニケーション能力を多くの企業が求めていることが分かった。そこで、人間力の中でも重要視している利他の精神、感謝の心、チャレンジ精神を掲げた。本校の校訓は、開拓精神の啓培、下座の行を尊ぶ、創造性を培うの3つであることから、共通項として人間力を位置付けた。また適応力として基礎学力、専門知識、創意工夫を掲げた。適応力を養うためには、共通教科の基礎基本、専門教科

⁵ AGU ビジネスレビュー前掲論文, pp28-29。

⁶ 同上, p17。

表 3-1 2020 岡商グランドデザイン

岡商生が身につけたい「か・き・く・け・こ」 感動→興味→工夫→決断→行動→感動→興味→のサイクルを身につけよう		2020 岡商 GRAND DESIGN		
何 が で き る よ う な こ と を 教 え る か ど の よ う に 教 え る か	育てたい生徒像 即戦力となる社会人を育成する	身に付けたい資質・能力 人間力 通応力		
	岡商モットー 「士魂商才」 武士の精神（自分自身と向き合う強さ） 商人の知恵（利他の精神） を兼ね備えた人財の育成	学びの姿勢 ・学習意欲や探究心を高める、地域に開かれた教育課程 ・岡商ステップアップアンケートを活用した授業マネジメントの実施		
	学年で一貫した取り組み	商業（総合ビジネス・国際ビジネス・情報処理・情報会計） 目標：ビジネスに関する知識・技術、課題解決能力、主体的・協働的態度の育成 方法：ビジネスに関連させた実践的・体験的な学習活動		
	1年 目標を立て、未来の自分のための行動 ・新しいことへの意欲的な挑戦 ・学習習慣の定着 ・挨拶の励行と時間・ルールの遵守	1年 自己を知る・人間関係を築く 「憧れ」「自己理解」	国語 社会に通用する豊かな語彙力・共感力・自己発信力を持つ人材の育成	地歴・公民 ・憲法、政治、経済、社会について正確な知識を持ち、地域社会に貢献できる市民の育成 ・世界の多様な文化、歴史について理解し、国際化に対応、貢献できる市民の育成
	2年 1つ上のレベルへの挑戦 ・資格取得をはじめとした知識・技術の習得 ・大人の言動と周囲への配慮 ・上質なマナーの習得	2年 社会を知る・職業を知る 「挑戦」「自己啓発」	理科 科学的な知識や概念の定着と科学的な見方や考え方を育成	数学 問題演習を通じて、柔軟な思考力や発想力を養い、筋道を立てて正しく考える力を育成
	3年 社会に出るための準備 ・基礎学力の充実 ・物事を深く考える力 ・多様性への理解と利他の心	3年 社会での自分の役割を考える 「貢献」「自己実現」	外国語 ・英語が世界への「窓」を開くツールであることを理解させ、その「道具」の活用 ・世界の人々と様々なことを共有できる英語力の基礎を育成	保健 グループ学習や調べ学習などを通して、自らの健康について主体的に考えて行動できる資質や能力を育成
	道徳教育 特別活動 それぞれが客観的視点に立ち、より多くの生徒が充実感を感じることができる 清掃活動 活動場所の問題点に気づき、他者と協力しながら自主的に行動を起こすことができる 相談活動 他者を思いやる言動を心がけ、必要な際には他者に相談することができる	読書習慣・活字に触れる 図書館だよりを活用して生徒に読書習慣の育成。さらにヒブリアバトルを実施して読書の質の向上		
	部活動 加入率と継続率の向上作戦	組織的な生徒指導 ・さわやかな挨拶を身につける ⇒ 校門指導およびST、授業の前後 ・社会人を意識した身だしなみ ⇒ 学校生活全般		
	運動部 ソフトテニス（男女）・バスケットボール（男女）・弓道（男女）・剣道（男女）・柔道（男女）・陸上競技（男女）・硬式野球・ハンドボール（女） 新体操（女）・ソフトボール（女）・バレーボール（女）・卓球（女）・サッカー（女）	連携機関 ・岡崎女子大学短期大学、名古屋産業大学、育達科技大学（台湾） PTA ・PTA総会、PTA通信の発行、岡商祭への協力依頼 同窓会 ・120周年行事の計画立案（2022年：120周年式典） 地域 ・学校評議員の委嘱、行事の際の協力依頼		
	岡商のブランドカ（岡商ブランド向上委員会の設置） 制服の検討、岡商バッグを含む岡商グッズの見直し、岡商のトータルコーディネート、120周年（2022年）に向けた取組計画立案	文化部 OKASHOP・情報処理・簿記・ワープロ 電卓・商業美術・吹奏楽・演劇・新聞・家庭・茶華道・音楽・国際交流・ダンス・ボランティア		

の基礎基本が大切である。学んだ知識をどのように生かしていくか、工夫したことをどのように実践できるかを適応力として位置付けた。さらに、コミュニケーション能力として、多様性を認め合える、他人の話をしっかり聞き受け止める、自分の意見を述べることを目標に掲げた。

(3) 各学年での取組

育てたい生徒像、身につけたい資質・能力を段階的に身につけることができるよう、各学年で一貫した取組を掲げた。1年生は目標を立て、未来の自分のための行動を目標とした。具体的には、新しいことへの意欲的な挑戦、学習習慣の定着、あいさつの励行と時間・ルールの遵守に取り組めるよう計画した。2年生は1つ上のレベルへの挑戦を目標とした。具体的には、資格取得をはじめとした知識・技術の取得、大人の言動と周囲への配慮、上質なマナーの取得を目指して取り組めるよう工夫した。3年生は社会に出るための準備を目標とした。具体的には、基礎学力の充実、物事を深く考える力、多様性への理解と利他の心を養うよう取り組めるよう計画した。

(4) 進路指導での取組

進路指導は、高校教育の要であり、卒業時の進路決定を見据えて段階的な取組が必要である。各学年の目標と補完し合うよう工夫されている。具体的には、1年生では、自己を知る・人間関係を築くことから憧れや自己理解を深めさせている。2年生では、社会を知る・職業を知ることから積極的にさまざまなことに挑戦させ、自己啓発につなげている。3年生では、社会での自分の役割を考えさせることで貢献することの意味や自己実現の在り方を追求させている。

(5) 教務指導での取組

普段の学習指導については、学びの姿勢が最も大切であると位置付けている。具体的には、学習意欲や探求心を高めるための工夫や地域に開かれた教育課程になるようホームページに掲載するだけでなく、高大連携、企業連携による学習効果を期待できる内容にした。また、本校生徒に対して、年2回岡商ステップアップアンケートを実施し、生徒の学習意欲について調査した。教職員は、その結果を活用し、分かりやすい授業をマネジメントするよう努めた。

(6) 生徒指導での取組

学習活動を円滑にすすめるための要素の一つとして、生徒指導を組織的に行うことが重要である。生徒指導を通して高い社会性を身に付けさせることは、学習活動にも影響を与える。具体的には、さわやかな挨拶を身に付けさせるために、生徒会等の生徒や教職員が校門であいさつ活動を実施している。授業の開始、終了時の礼の仕方についても丁寧に実践することを意識させている。学校生活全般において、社会人を意識した身だしなみができるよう取り組んでいる。

(7) 専門教科・商業での取組

本校では、2年次より4つの学科（総合ビジネス科、国際ビジネス科、情報処理科、情報会計科・令和5年度からはグローバルビジネス科、ITビジネス科、会計ビジネス科）に分かれ、より専門性の向上を図っている。基本的な目標は、ビジネスに関する知識・技術、課題解決能力、主体的・協働的態度の育成である。具体的には、ビジネスに関連させた実践的・体験的な学習活動を通して知識、技術を定着させることをねらいとしている。前述の総合ビジネス科では、ビジネスに関する幅広い分野の知識・技術を学び、コミュニケーション能力を身に付けさせている。国際ビジネス科では、国際理解に関する知識とマナーを学び、グローバル経済に対応できる能力を身に付けさせている。情報処理科では、情報に関する知識・技術・モラルを学び、情報をより高度で有効に活用する能力を身に付けさせている。また、情報会計科では、簿記会計分野の学習を中心にビジネスに関する知識を学び、会計及び情報の活用能力を身に付けさせている。

(8) 共通教科での取組

共通教科での学びは、基礎基本であり基礎学力として定着を図っている。国語科では、社会

に適用する豊かな語彙力・共感力・自己発信力を人材の育成を目標に実践している。地歴・公民科では、憲法、政治、経済、社会について正確な知識をもち、地域社会に貢献できる市民の育成を目標に実践している。また、世界の多様な文化、歴史について理解し、国際化に対応、貢献できる市民の育成に力をいれている。数学科では、問題演習を通じて、柔軟な思考力や発想力を養い、筋道を立てて正しく考える力を育成することを目標に実践している。理科では、科学的な知識や概念の定着と科学的な見方や考え方の育成を目標に実践している。保健体育科では、グループ学習や調べ学習などを通して、自らの健康について主体的に考えて行動できる資質や能力の育成を目標に実践している。また、生涯を通じて運動に親しむことができるように、技能だけでなく、各種目の特性の理解や知識の習得なども目標にした授業を展開している。英語科では、英語は世界への窓を開くツールであることを理解させ、その道具の活用を目標に実践している。また、世界の人々と様々なことを共有できる英語力の基礎の育成に力を入れている。家庭科では、人の一生と生活全般に関する知識・技術の育成を目標に実践している。芸術科（音楽・美術・書道）では、豊かな心の育成、表現方法の習得と活用、生涯を通じて学ぶ姿勢の育成を目標に実践している。

（9）学校行事等の役割

年間の行事予定には、生徒を大きく成長させる特別活動、清掃活動、相談活動等が大きな役割を担っている。修学旅行、遠足、学校祭などの特別活動は、学校の行事として位置付けられている。それぞれが客観的な視点に立ち、より多くの生徒が充実感を感じることができるような目標をたて実践している。また、毎日の清掃活動は、活動場所の問題点に気づき、他者と協力しながら自主的に行動を起こすことができるように働きかけている。加えて、メンタルヘルスケアの充実の観点から相談活動も多岐にわたっている。他者を思いやる言動に心がけ、必要な際には他者に相談できる力を育むことを主眼にしている。

（10）地域連携での取組

商業高校の特色の一つであるが、学校を取り囲む地域とどのように連携していくかが課題である。高大連携、地域連携、企業連携等多岐にわたる取組は、生徒の成長を伸ばさせている。また、広い視野、専門的な知識、コミュニケーション能力の必要性を感じさせる契機になっている。具体的には、企業等でのインターンシップ、大学での講義受講、地域活動としての清掃など主体的、積極的に活動する場面であることを強調している。

（11）部活動の位置付け

本校では、課外で部活動に所属するよう呼び掛けている。1年次には全員加入であるが2年次以降は自由参加である。令和2（2020）年度の部活動加入率は86%であることから、多くの生徒が継続して活動していることがうかがえる。年度当初、顧問に割り当てられた教職員は、生徒一人一人の個性が発揮できるよう部活動の在り方を工夫している。運動部には、ソフトテニス、バスケットボール、弓道、剣道、柔道、陸上競技、ハンドボール（女）、新体操（女）、

ソフトボール（女）、バレーボール（女）、卓球（女）、サッカー（女）がある。文化部には、OKASHOP、情報処理、簿記、ワープロ、電卓、商業美術、吹奏楽、演劇、新聞、茶華道（女）、音楽、国際交流、ダンス（女）、ボランティアがある。本校の男女比率は、2対8であることから、女子のみの部活動が存在する。

（12）その他

スマートフォン等の普及にともない、ますます活字離れが進む傾向にある。本校では、図書館活動を充実させるために、ビブリオバトルを実施し読書の質の向上を図っている。また、定期的に図書館日より発行し、新刊案内や本の紹介を行うことで生徒の読書習慣を育成している。

本校令和4（2022）年に創立120周年を迎える。長い歴史と伝統をさらに継続させていくために、岡商ブランド向上委員会を設置した。この委員会では、制服の検討、岡商指定バッグを含む岡商グッズを見直してトータルコーディネートを目指している。

以上のように、2020岡商ブランドデザインを掲げ、教職員、生徒、保護者に向けて目標を示した。ブランドデザインが身近で分かりやすい、実践してみたいと思わせる方法として、岡商生が身につけたい、かきくけこ、を提示した。即戦力となる社会人になるための基本、生きる力が基礎になると考えた。常日頃から意識することで成長している自身を実感できるサイクルである。まず感動すること。感動すれば興味が自然と湧いてくるであろう。興味をもつと、どうすれば上手くできるようになるか考え、自ずと工夫するようになる。工夫を繰り返していくうちに得意なこと、挑戦してみたいことが見えてくる。そこで、もっと頑張ってみようと思断する。この決断は、成功するか失敗するかではなく、行動するための決意表明としてとらえる。行動することで自ずと結果が出てくるが、何かしらの感動に結びついていると考える。失敗しても努力した自分に感動するし、上手くいけば喜びや自信につながり大きな感動を得ると考え、このサイクルは生きる力を育成することにつながっている。生きる力があってこそ即戦力となる社会人になれると確信している。

4 グランドデザインの目標達成状況

4.1 高校3年生を対象としたアンケートの実施

令和3（2021）年2月、卒業前に3年生に対してアンケートを実施した。2020岡商ブランドデザインの目標である即戦力となる社会人に近づくことができたかを分析、考察する。

（1）商業高校へ進学した理由

本校へ進学した理由について表4-1、図4-1でまとめた。もっとも多かった理由は、就職希望だったからが全体の29%であった。次に、自分の学力にあったからと答えたのは、20%を占めていた。続いて、就職もできる・進学もできる学校だったからが14%、家族にすすめられたからが13%であった。

表 4-1 進学した理由の集計

自分の学力にあっていたから	106
就職希望だったから	152
進学希望だったから	10
就職もできる・進学もできる学校だったから	76
中学校の先生にすすめられたから	26
家族にすすめられたから	70
岡崎商業高校の先輩にすすめられたから	12
魅力的な学科があったから	33
やりたい部活があったから	24
その他	21

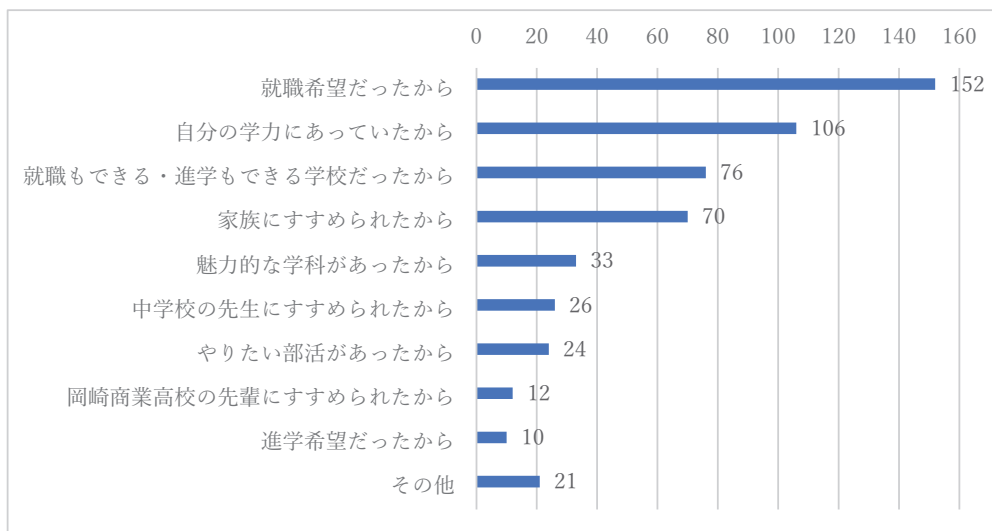


図 4-1 商業高校へ進学した理由について

(2) 学科を選んだ理由

1年次で学んだ専門科目の学びを深めるために、2年次から学科に分かれ、発展的な内容を学習している。学科を選んだ理由を表4-2、図4-2にまとめた。それぞれの学科を選んだ理由は、就職を考えていたからが一番多く、全体の23%であった。次にたくさん資格が取得できるからが20%を占めていた。続いて、海外修学旅行へ行きたかったからが13%、簿記分野の学習が好き（得意）だったからが10%であった。

(3) 部活動への参加状況

本校における部活動の位置付けおよび影響力がどの程度であるか知るために、部活動への参加状況を調査し、表4-3と図4-3にまとめた。3年間同じ部活に所属していた、3年間どこかの部活に所属していた、のどちらかを回答した生徒は、全体の77%を占めていた。また、1年生まで部活に所属していた、と回答したのは15%であり全体の参加状況は図4-3で示した。

表 4-2 学科を選んだ理由の集計

簿記分野の学習が好き（得意）だったから	43
情報分野の学習が好き（得意）だったから	34
進学したいと考えていたから	30
就職したいと考えていたから	95
海外修学旅行へ行きたかったから	53
国内修学旅行へ行きたかったから	10
たくさん資格が取得できるから	82
部活に力を入れたかったから	24
その他	45

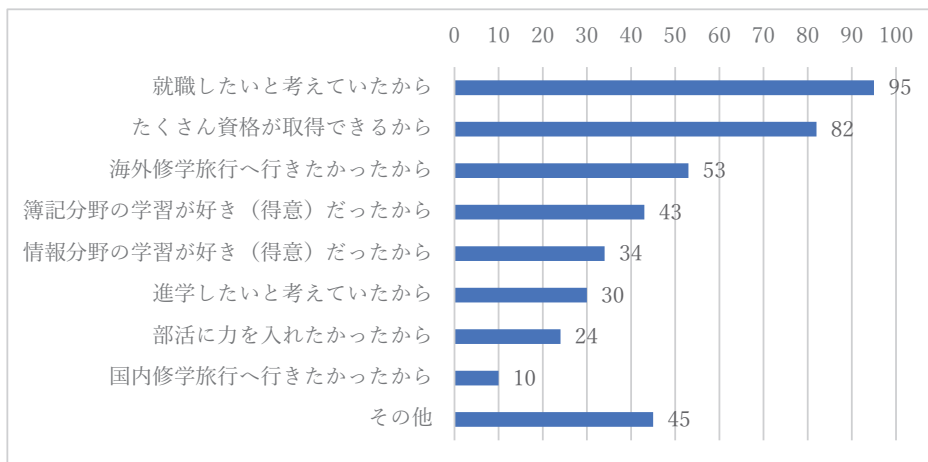


図 4-2 学科を選んだ理由について

表 4-3 部活動への参加状況

3年間同じ部活に所属していた	187
3年間どこかの部活に所属していた	7
2年生まで部活に所属していた	15
1年生まで部活に所属していた	39
その他	5

(4) 部活動に対する生徒評価

部活動への満足度をはかるために、上記(3)で回答した所属の部活動に対する評価を表4-4に示している5段階の基準を用いて調査した。60点以上の評価をつけた生徒が213名であり全体の74%を占めている。80点以上の高い評価をつけた生徒は、133名であり全体の46%を占めており、このことから学校生活に占める部活動の役割が大きいことが推測できる。また、本校の部活動に対する評価(表4-4、図4-4)は、概ね満足していることがわかる。

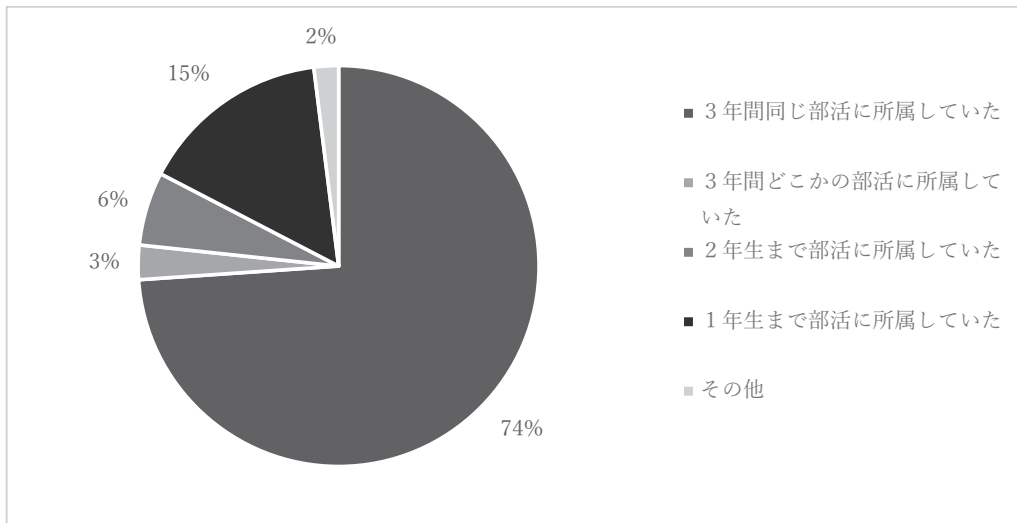


図 4-3 部活動への参加状況

表 4-4 部活動に対する生徒評価

100点	80～99点	60～79点	40～59点	39点以下
56	77	80	38	37

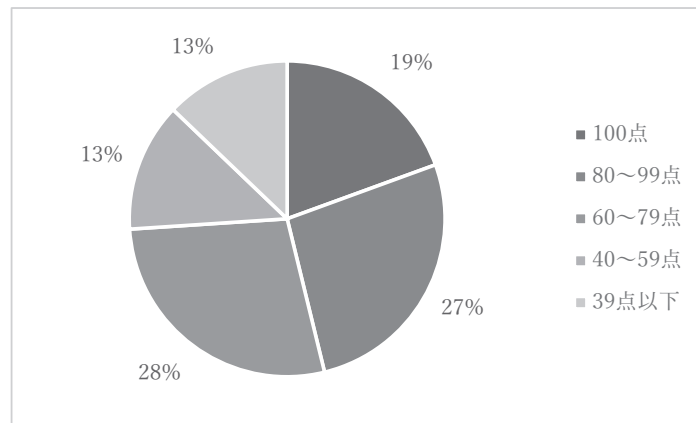


図 4-4 部活動に対する生徒評価

(5) 3年間の友人関係について

高校生活を充実させる要素として友人の存在があると考えられる。3年間の友人関係について調査し、表 4-5、図 4-5 にまとめた。心から信頼できる友人に出会ったと回答したのは、21%であり 5 人に 1 人以上が選択している。同じ学科に信頼できる友人がいる、同じ部活に信頼できる友人がいる、のどちらかに回答している生徒は、全体の 31%であり、高校生活における学科、部活の影響は大きいと推測できる。また、信頼できる友人は 1～2 名いる、信頼できる友人は 3 名以上いる、のどちらかに回答している生徒は 23%であった。この割合からみると、高校生活の 3 年間で信頼できる友人が見つかり、生涯の友人につながる可能性は否定できないであろう。

表 4-5 友人関係について

心から信頼できる友人に出会った	162
信頼できる友人は、1～2名いる	82
信頼できる友人は、3名以上いる	89
同じ学科に信頼できる友人がいる	138
同じ部活に信頼できる友人がいる	100
友人からも信頼されていると感じている	50
友人の気持ちはわからないが、自分は信頼して3年間過ごした	51
1年時のクラスの友人を、一番信頼している	29
2年時のクラスの友人を、一番信頼している	38
友人関係については、ずっと悩んでいた	17
その他	3

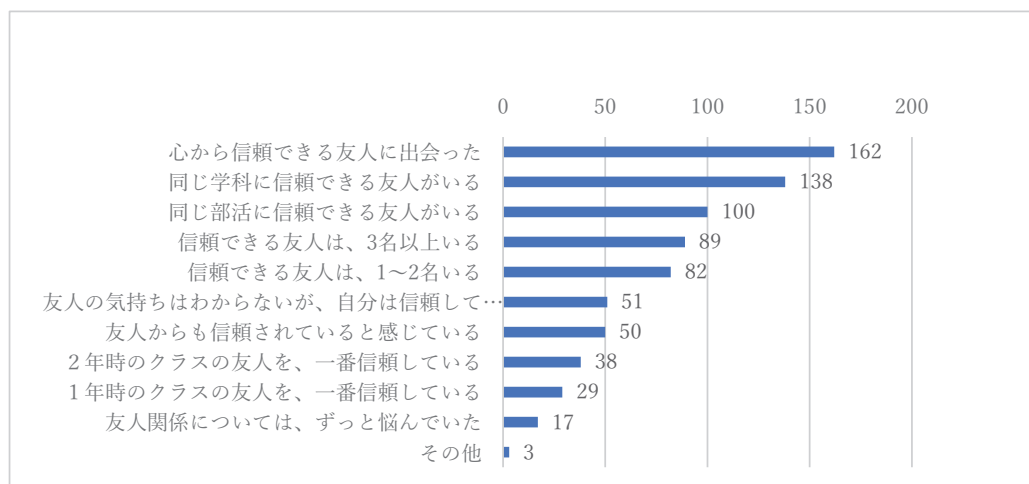


図 4-5 友人関係について

(6) 自宅での学習環境について

学習環境を知るために生徒専用の学習スペースの有無を調査し、表 4-6 および図 4-6 にまとめた。自分一人の勉強部屋がある、と回答したのは全体の 55%であった。リビング（居間）で勉強することが多かったが 24%であり、このアンケート項目の調査からは、おおむね家族の協

表 4-6 学習環境について

自分一人の勉強部屋がある	200
兄弟姉妹と同室の勉強部屋がある	29
リビング（居間）で勉強することが多かった	87
キッチン（台所）で勉強することが多かった	3
自分の部屋はないが、家の中ならどこでも勉強できる	11
自宅では勉強しなかった	32
その他	1

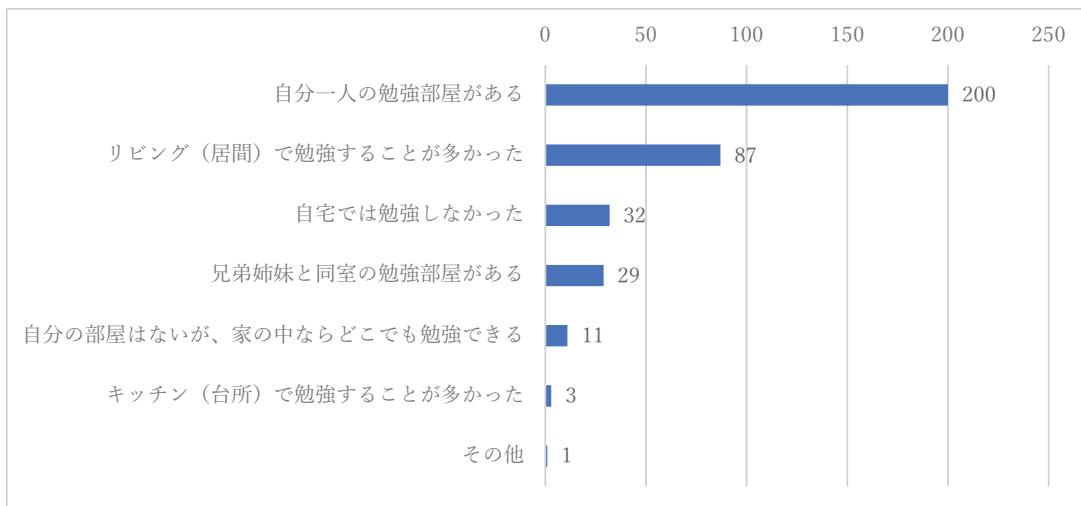


図 4-6 学習環境について

力体制を得ているといえよう。また、8%の生徒は自宅では勉強しなかったと回答している。

(7) 高校生活で頑張ったことについて

高校生活をより充実させるために、学校行事等は大きな魅力になると考えている。その中でも、生徒が頑張ったことを回答させ、表 4-7 および図 4-7 のようにまとめ学校の魅力について考察する。生徒が高校生活で頑張ったこととして、一番多かった回答は、資格取得が30%であった。資格取得は、高校3年間で商業の専門性を高め、知識や技術を得た証明ともいえる。求人企業からは在学中の努力の結果であったり、学習の成果として評価されることもある。合格、不合格にかかわらず結果を受け取ることで、生徒の意欲が引き出される。また、部活動20%は上記(4)でも論じているが、高校生活で重要な役割をもっていると図 4-7 から分かる。勉強（定期考査）が14%を占めていることは、中学校で得られなかった上位成績を高校で獲得し、学習に対する充実感を得ている一定の生徒層であると推測している。加えて、自主性や主体性が培われる学校行事（体育祭）には13%の生徒が達成感をもち、8%の生徒は欠席をしない、皆勤である、と回答していることから健康に自信をもっていることが分かる。

表 4-7 高校生活で頑張ったこと

勉強（定期考査）	53
資格取得	113
部活動	78
学校行事（体育祭）	48
学校行事（文化祭）	38
学校行事（音コン）	17
生徒会	1
皆勤（欠席なし）	30
その他	4

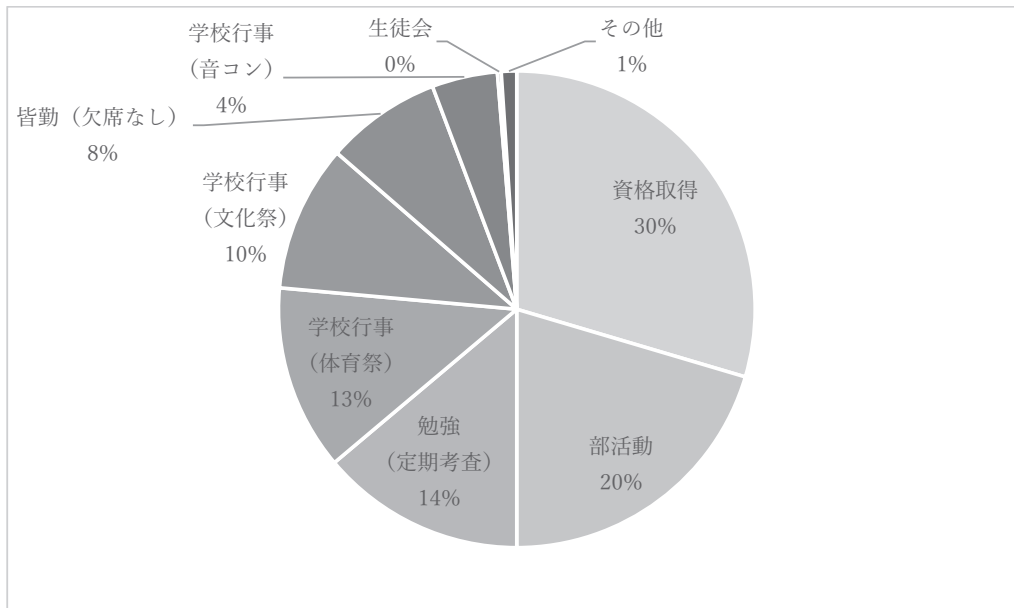


図 4-7 高校生活で頑張ったこと

(8) 商業高校で身に付いたこと

表 3-1 のグランドデザインにある人間性、適応力、コミュニケーション能力をどのような場面で身に付けることができたかを分析、考察する。この質問項目には、グランドデザインの目標を達成するための行動基準をそのまま使用した。調査結果を表 4-8 および図 4-8 にまとめた。商業高校で学んだ専門知識と回答した生徒は全体の 18%であった。続いて、社会人になるための準備（言葉遣い・マナー）が 15%、チャレンジ精神が 10%、社会人を意識した身だしなみが 8%、人の話をしっかり聞き、受け止めるが 7%であった。

(9) 卒業後の進路について

卒業後の進路は、将来のキャリア設計に大きな影響を与えると思われる。生徒一人一人が自己実現できる進路へ導くことは、学校としての大きな役割である。令和 3（2021）年 3 月卒業生の就職者は、表 4-9 および図 4-9 から分かるが、全体の 65%を占めており、例年と比較して就職する生徒が多かった。令和 2（2020）年 2 月以降から大流行している新型コロナウイルス感染症による影響もあったと考えられる。また、専門的なスキルを身に付けることができる専門学校への進学が全体の 22%を占めていた。例年、専門学校への進学は多く、早い段階で自分の適性を見付けキャリア設計をしているといえよう。四大、短大への進学は全体の 11%の割合であり、生徒は商業の専門性を深化させたり、高校時代の学びとは異なる道を選択したりしている。

(10) 本校への評価

本校への総合的な評価については、記述式の解答欄を設け、100 点満点中の点数で評価させた。ただし 30 点未満は赤点であることを明記した。その結果、100 点満点中、69.1 点が平均

評価点であった。コロナ禍で地域貢献活動ができなかったこと、学校行事が変更、削減されたことは、評価が低くなった一因であるといえよう。この評価を100点にするために必要なことを記述の欄に記載させた。記述欄には、多くの可能性があるよい学校だがその可能性を切り開くためには、自身でチャレンジしていかななくてはならないこと、特に学校の仕組みを理解し

表 4-8 商業高校で身に付いたこと

利他の精神	11
感謝の心	61
チャレンジ精神	85
基礎学力	52
専門知識	153
創意工夫	16
自分の意見を述べる	35
人の話をしっかり聞き、受け止める	63
多様性を認め合う	38
岡商生のかきくけこ（感動・興味・工夫・決断・行動のサイクル）	17
社会人になるための準備（言葉遣い・マナー）	130
読書習慣	19
さわやかな挨拶	30
社会人を意識した身だしなみ	73
自主的な行動力	33
地域との協力	23
その他	26

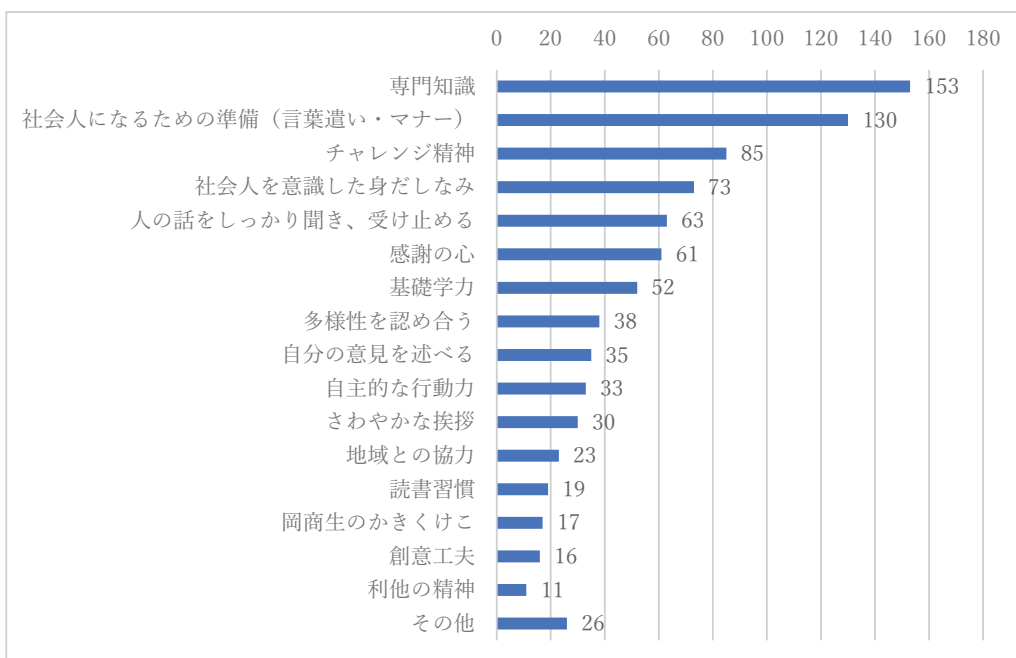


図 4-8 商業高校で身に付いたこと

表 4-9 卒業後の進路について

就職	四大	短大	専門学校	フリーター	未定
182	21	12	61	1	5

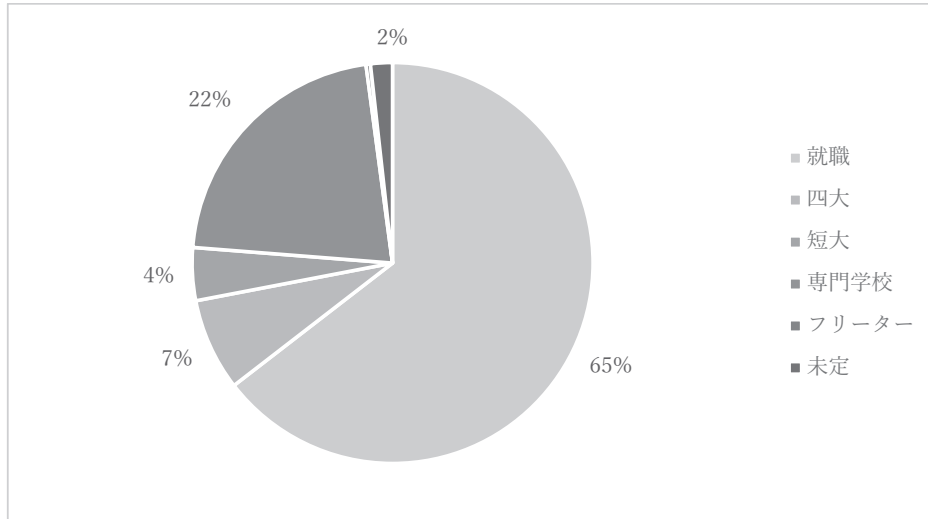


図 4-9 卒業後の進路について

ないといけなないので、そこをより多くの人に伝えていくとよい、といったアドバイスが記載されていた。

4. 2 高校 1 年生および 2 年生を対象としたアンケートの実施について

(1) 選択した学科について

入学時は、全科（一括募集）で学習を開始する。1 年次の 3 学期に、生徒自身が 2 年次に進む学科を決定する。令和 2 年度、表 4-10 で示したように 2 年生は、国際ビジネス科は 2 学級（78 名）、情報処理科 2 学級（80 名）、総合ビジネス科 1 学級（37 名）、情報会計科 2 学級（74 名）で構成されている。

表 4-10 学科選択の状況について

	1 年生（令和 2 年度入学）	2 年生（令和元年度入学）
国際ビジネス科	78	76
情報処理科	80	80
総合ビジネス科	37	33
情報会計科	74	74

(2) 部活動への所属状況

部活動への所属状況（表 4-11）から、1 年次の 3 月時点では、全体の 99% の生徒がいずれかの部活動に所属していることが分かる。また、図 4-10 でも示したように 92% の生徒は、2

年次に進級した後も部活動を継続する意志が見受けられる。本校では、2年次以降の部活動は自由参加としているが、2年次の3月時点では、図4-11からも分かるが約83%の生徒は部活動に所属しており、3年次も引き続き同じ部活動で継続する意向を示している。

表 4-11 部活動の所属状況について

	1年生（令和2年度入学）	2年生（令和元年度入学）
はい	246	216
いいえ	2	45
退部する予定	18	0
転部する予定	2	0

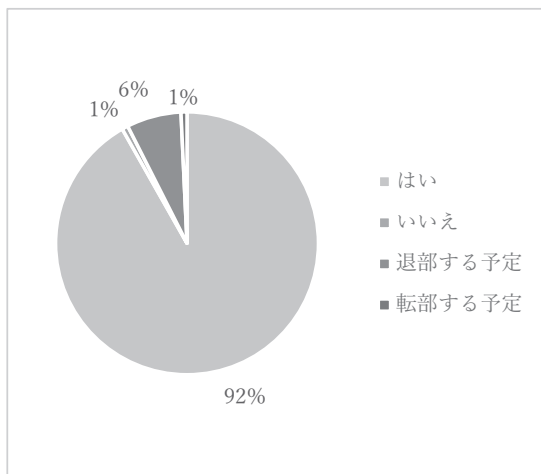


図 4-10 部活動への参加率（1年生）

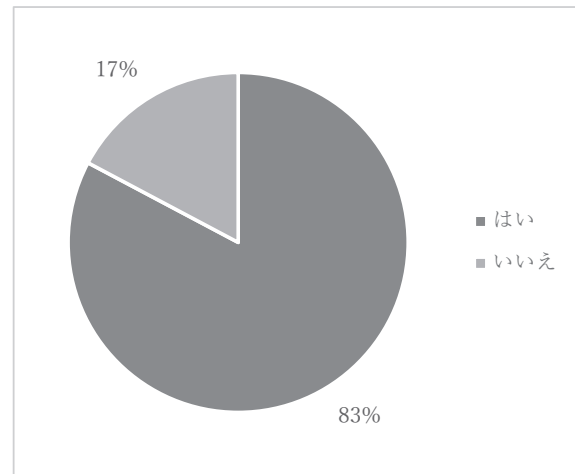


図 4-11 部活動への参加率（2年生）

(3) 部活動に対する生徒の自己評価

本校の生徒が部活動に対する自己評価を表4-12の評価点区分にあてはめる方法で回答した。1年生の89%の生徒が、60点以上の評価であり、概ね満足していると捉えることができる。また、80点以上と評価している生徒は、全体の46%を占めており、部活動は高校生活の重要な役割であることもうかがえる。2年生では、100点をつけた生徒が27名であり、1年生の13名と比較すると2.07倍である。図4-12と図4-13の円グラフを比較すると1年生と2年生の違いが明確になる。2年生は、部活動の中心的な役割を担い、やりがいに結びついていると分析している。また、80点以上と評価している生徒は全体の46%を占めており、この割合は上記の1年生と同じであり、部活動は高校生活で重要な位置付けであることが確認できる。

(4) 一年間で最も頑張ったこと（1年生および2年生）

高校生活を一層充実させるために、学校行事等には生徒たちを成長させる大きな魅力にがあると考えている。その中でも、1年生の生徒が最も頑張ったことを回答させ、表4-13のようにまとめ学校の魅力について考察する。資格取得と回答した生徒は、全体の38%を占めていた。

表 4-12 部活動への自己評価点

評価点区分	1年生（令和2年度入学）	2年生（令和元年度入学）
100点	13	27
80～99点	111	94
60～79点	107	85
40～59点	0	24
39点以下	29	8

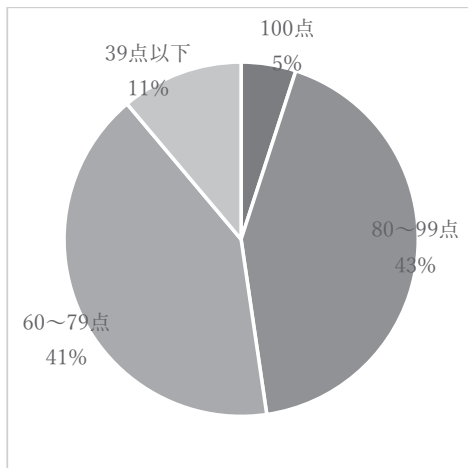


図 4-12 部活動への自己評価（1年生）

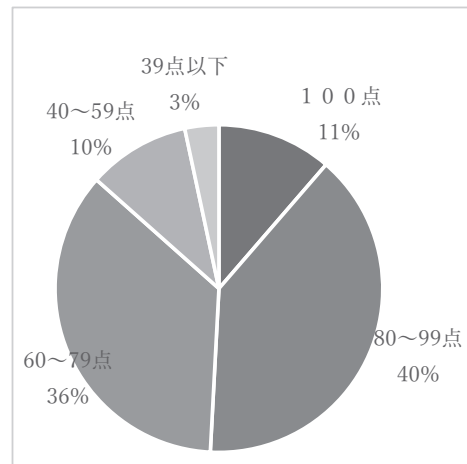


図 4-13 部活動への自己評価（2年生）

表 4-13 一年間で最も頑張ったこと（1年生）

勉強（定期考査）	35	14%
資格取得	95	38%
部活動	52	21%
学校行事（体育祭）	14	6%
学校行事（文化祭）	22	9%
学校行事（クラス・学年LT）	4	2%
生徒会	0	0%
皆勤（欠席なし）	26	10%
その他	2	1%

部活動が21%、勉強（定期考査）が14%となった。10%の生徒は欠席をしない、皆勤である、と回答していることから健康に自信をもっているといえよう。同様に、2年生については表4-14および図4-15に示した。資格取得と回答した生徒は全体の39%を占めていた。部活動が19%、勉強（定期考査）が18%となった。13%の生徒は欠席しないことが大切であると考えていることが分かった。

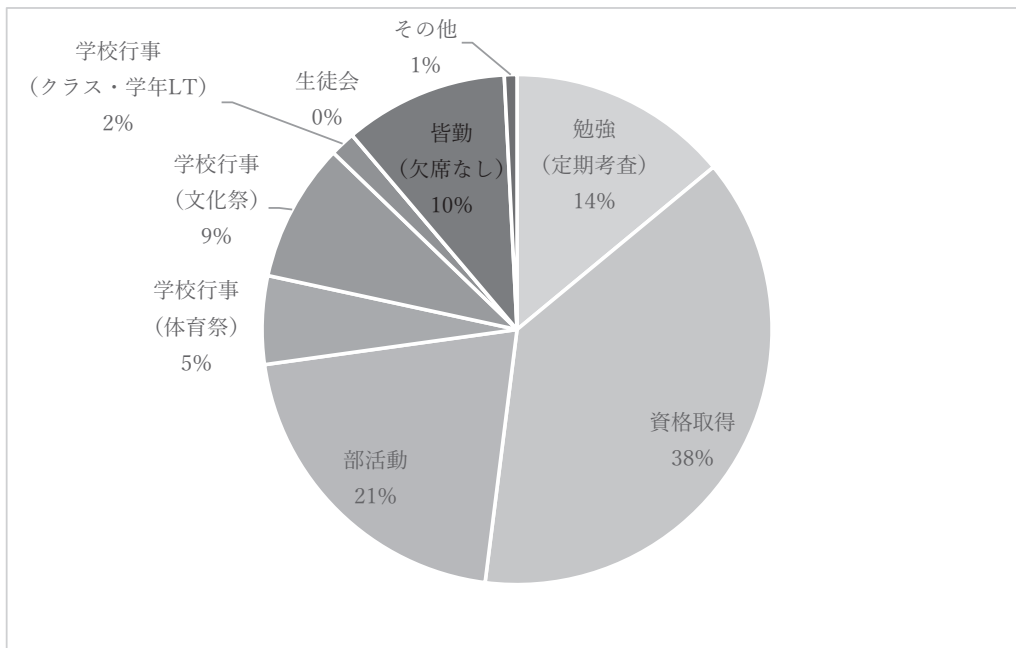


図 4-14 一年間で頑張ったこと (1年生)

表 4-14 一年間で最も頑張ったこと (2年生)

勉強 (定期考査)	43	18%
資格取得	93	39%
部活動	46	19%
学校行事 (体育祭)	5	2%
学校行事 (文化祭)	19	8%
学校行事 (クラス・学年 LT)	2	1%
生徒会	1	0%
皆勤 (欠席なし)	30	13%
その他	2	1%

(5) 授業で学んだことに対する評価 (1年生・2年生)

授業で学んだことに対する自己評価 (表 4-15、表 4-16) は、生徒がそれぞれの授業で学んだこと、成長できたことを評価 1～4 で一番近いものを選択させた。評価 1 は、各教科・科目に対してあまり興味ももてず何を学んだのかよくわからない、評価 2 は、積極的には取り組めなかったが、テストだけは頑張った、評価 3 は、積極的に取り組み、成績に反映した、評価 4 は、大いに興味をもち、より深く学びたくなった、という 4 段階とした。2 年生の評価も同様の基準である。この基準に従うと、項目内容は評価点に置き換え可能なアンケートになり、最高点が 4 点、最低点が 1 点、平均値は 2.5 点となる。1 年生で評価点が一番高かったのは、専門科目・簿記であり、大いに興味をもち、より深く学びたくなった、積極的に取り組み、成績に反映した項目を選択した生徒は、全体の 72.5% (195 名) であり、評価点は 2.9 点であった。2 年生で評価点が一番高かったのは、専門科目・財務会計 (情報会計科) であり、大いに

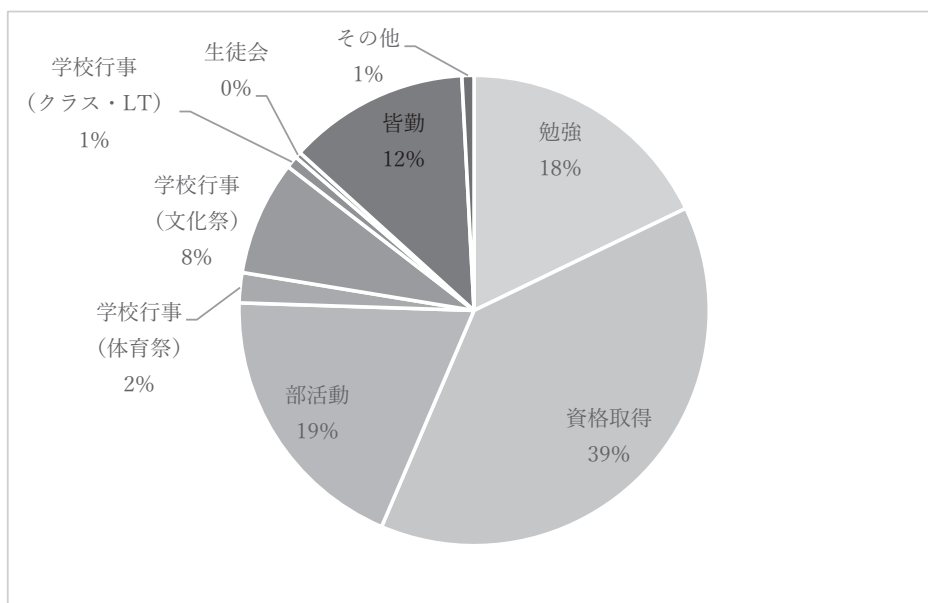


図 4-15 一年間で頑張ったこと (2 年生)

表 4-15 授業で学んだことに対する自己評価 (1 年生)

科目	評価	1	2	3	4	平均評価点
国語総合		31	129	96	12	2.3
現代社会		31	156	71	11	2.2
数学 I		26	127	99	17	2.4
体育		4	87	127	51	2.8
保健		16	136	103	13	2.4
音楽 I ・美術 I ・書道 I		28	91	118	32	2.6
コミュニケーション英語		32	130	84	23	2.4
ビジネス基礎		13	110	113	32	2.6
簿記		6	68	129	66	2.9
情報処理		8	97	121	43	2.7

表 4-16 授業で学んだことに対する自己評価 (2 年生)

科目	評価	1	2	3	4	評価平均点
現代文 B		38	130	81	13	2.3
世界史		20	102	94	46	2.6
数学 A		36	125	86	15	2.3
科学と人間生活		39	149	64	10	2.2
体育		14	87	100	60	2.8
保健		23	126	89	24	2.4
コミュニケーション英語		24	104	106	28	2.5
英語会話		21	114	95	33	2.5
家庭総合		26	131	80	26	2.4

総合ビジネス科					
課題研究	2	12	12	6	2.7
マーケティング	4	20	4	5	2.3
財務会計	1	13	15	4	2.7
原価計算	1	13	13	6	2.7
国際ビジネス科					
ビジネス実務	17	35	22	1	2.1
財務会計	8	34	24	9	2.5
原価計算	8	29	30	8	2.5
情報会計科					
財務会計	3	20	34	17	2.9
原価計算	4	23	32	15	2.8
ビジネス情報	10	35	25	4	2.3
情報処理科					
ビジネス情報	9	35	28	8	2.4
プログラミング	6	33	30	11	2.6
IT 概論	9	30	28	13	2.6

興味をもち、より深く学びたくなった、積極的に取り組み、成績に反映した項目を選択した生徒は、全体の 68.9% (51 名) であり、評価点は 2.9 点であった。

(6) 2020 岡商グランドデザインの目標達成状況 (1 年生・2 年生)

表 4-17 と表 4-18 は、グランドデザインの目標達成状況を目標項目別にまとめた。この目標は社会に必要とされる要素の 16 の項目について、生徒が日々の実践に合わせて評価 1～4 の段階評価を行った結果である。評価 1 は、それぞれの項目に対して、努力していないかもしれない、評価 2 は、時々実践したがまだ不十分、評価 3 は、時々実践し、少し身に付いたと感じる、評価 4 は、日頃から実践し、身に付いたと感じる、の 4 段階で評価させた。2 年生の評価も同様の基準である。この基準に従うと、項目内容は評価点に置き換え可能なアンケートになり、最高点が 4 点、最低点が 1 点、平均値は 2.5 点となる。1 年生で評価点が一番高かったのは、感謝の心であり、日頃から実践し、身に付いたと感じる、時々実践し、少し身に付いたと感じるという生徒は、全体の 90.3% (243 名) で、評価点は 3.5 点であり、多くの生徒が意識して実践していることが分かる。次に高い評価であったのは、利他の精神と人の話をしっかり聞き受け止めるが、それぞれ 3.1 点であった。一方、読書習慣に対する評価は、1.6 点であり学校として取り組んでいかななくてはならない課題であるといえる。2 年生で評価点が一番高かったのは、感謝の心であり、日頃から実践し、身に付いたと感じる、時々実践し、少し身に付いたと感じるという生徒は、全体の 84.4% (222 名) で、評価点は 3.3 点であり、多くの

表 4-17 グランドデザインの目標達成状況（1年生）

目標項目	評価	1	2	3	4	平均評価点
利他の精神		4	50	132	83	3.1
感謝の心		3	23	75	168	3.5
チャレンジ精神		23	100	104	42	2.6
基礎学力		16	103	122	28	2.6
専門知識		6	84	136	43	2.8
創意工夫		15	129	111	13	2.5
自分の意見を述べる		34	134	72	29	2.4
人の話をしっかり聞き、受け止める		2	51	134	82	3.1
多様性を認め合う		12	74	105	78	2.9
岡商生のかきくけこ		18	123	114	13	2.5
社会人になるための準備（言葉遣い・マナー）		9	80	127	53	2.8
読書習慣		175	43	29	22	1.6
さわやかな挨拶		12	74	106	77	2.9
社会人を意識した身だしなみ		6	56	132	75	3.0
自主的な行動力		12	66	134	57	2.9
地域との協力		77	122	59	10	2.0

表 4-18 グランドデザインの目標達成状況（2年生）

目標項目	評価	1	2	3	4	評価平均点
利他の精神		8	55	121	79	3.0
感謝の心		5	36	94	128	3.3
チャレンジ精神		23	86	116	38	2.6
基礎学力		24	113	106	20	2.5
専門知識		22	99	116	26	2.6
創意工夫		31	129	80	22	2.4
自分の意見を述べる		37	104	94	27	2.4
人の話をしっかり聞き、受け止める		7	44	138	73	3.1
多様性を認め合う		16	73	120	54	2.8
岡商生のかきくけこ		39	98	112	14	2.4
社会人になるための準備（言葉遣い・マナー）		14	83	127	39	2.7
読書習慣		144	51	41	27	1.8
さわやかな挨拶		21	99	93	49	2.6
社会人を意識した身だしなみ		15	68	134	46	2.8
自主的な行動力		16	85	117	45	2.7
地域との協力		85	109	57	12	2.0

生徒が意識して実践していることが分かる。次に高い評価であったのは、人の話をしっかり聞き受け止めるが、3.1点であった。三番目に高い評価であったのは、利他の精神が3.0点であった。一方、読書習慣に対する評価は、1.8点であり図書館の在り方を含めた読書活動に取り組む必要がある。

(7) 学校に対する評価について (1年生・2年生)

本校に対する評価について、生徒に直接点数を記入する方法(100点満点)で評価させた。30点未満は赤点であると明記した。1年生の平均点は67.9点であった。2年生は64.6点と学校に対する評価は、厳しいといえよう。対象者が異なるため1年生と2年生を直接比較することの妥当性はないが、参考となるデータとして考察するためには、次年度のアンケートと比較、検討することで明確になる。

5. 検証と今後の課題

5.1 グランドデザイン検証

ここで、3章および4章にて述べたグランドデザインについて、アンケート調査結果をもとに検証する。

(1) 1年生

図5-1に、表4-15にて示した授業で学んだことに対する自己評価の平均(1.0~4.0)と、4.2(7)にて示した生徒から見た高等学校に対する評価(100点満点)の関係を示す。

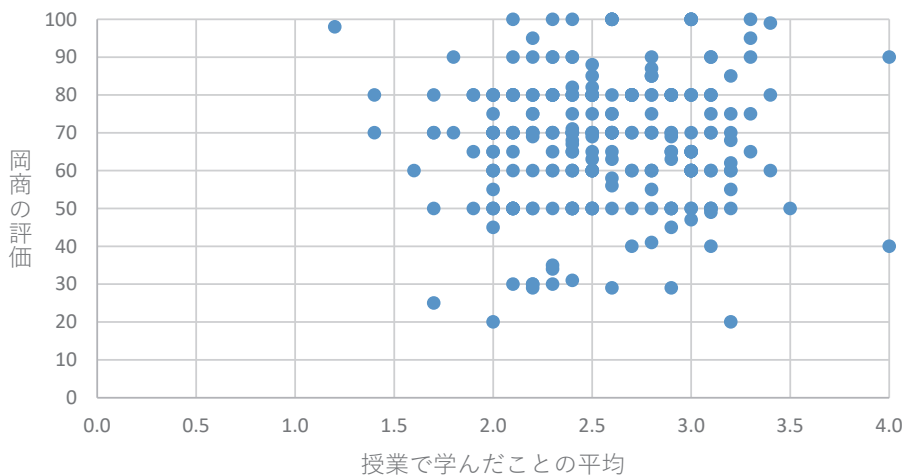


図5-1 授業で学んだことの自己評価と高等学校に対する評価の関係 (1年生)

また、学校運営における目標値として、生徒から見た高等学校に対する評価を60以上かつ授業で学んだことに対する自己評価の平均を3.0とした場合と、生徒から見た高等学校に対す

る評価を 50 以上かつ授業で学んだことに対する自己評価の平均を 2.5 とした場合の生徒数について、表 5-1 に示す。

表 5-1 高等学校への評価と授業で学んだことの自己評価（1 年生）

目標値	人数	全生徒に対する比率
60 点以上かつ 3.0 以上	44	16%
50 点以上かつ 2.5 以上	139	52%

図 5-1 および表 5-1 からわかるように、高等学校に対する評価が 50 点としている生徒が多く、目標値を 50 点以上かつ 2.5 以上の生徒が全体の半数以上を占めている。そこで、本研究においては、50 点以上かつ 2.5 以上を基準に、図 5-2 に示す区分にて議論を進めることにする。

B 岡商の評価 50 以上で、授業で学んだことの平均 2.5 未満	A 岡商の評価 50 以上で、授業で学んだことの平均 2.5 以上
D 岡商の評価 50 未満で、授業で学んだことの平均 2.5 未満	C 岡商の評価 50 未満で、授業で学んだことの平均 2.5 以上

図 5-2 授業で学んだことの自己評価と高等学校に対する評価の関係区分

図 5-2 は、高等学校への評価と授業で学んだことの自己評価についての分布を 4 つに分割したものである。図 5-2 における区分 A を目標としたうえで検討を行うとともに、区分 D についても、その傾向について考察を行う必要がある。区分 A～区分 D の分布を表 5-2 に示す。

表 5-2 区分 A～D の分布

区分 A	139
区分 B	106
区分 C	10
区分 D	11

表 5-2 に示したように、区分 D に 4% の回答を受けているが、ここで回答した生徒にとってこの 1 年間で最も頑張ったことを表 5-3 に示す。

表 5-3 この 1 年間で最も頑張ったこと（区分 D）

1：勉強（定期考査）	1
2：資格取得	3
3：部活動	1
5：学校行事（文化祭）	4
8：皆勤	3
未回答	1

表 5-3 に示したように、区分 D の生徒にとって、この 1 年間で最も頑張ったこととして学校行事（文化祭）、資格取得、皆勤が上位を占めていることがわかる。表 5-4 に、区分 D の生徒にとっての部活動の評価の分布を示す。

表 5-4 部活動に対する評価（区分 D）

100 点	0
80 ～ 99 点	9
60 ～ 79 点	4
40 ～ 59 点	1
39 点以下	

表 5-4 に示したように、部活動に対する評価として 80 ～ 99 点および 60 ～ 79 点への分布が大多数を占めていることから、学校に対する評価が低くても必ずしも部活動に対する評価が低いとは限らないことがわかる。

次に、グランドデザインの検証を行う。図 5-3 に授業で学んだことの平均と、表 4-17 にて示したグランドデザインの平均との関係を示す。

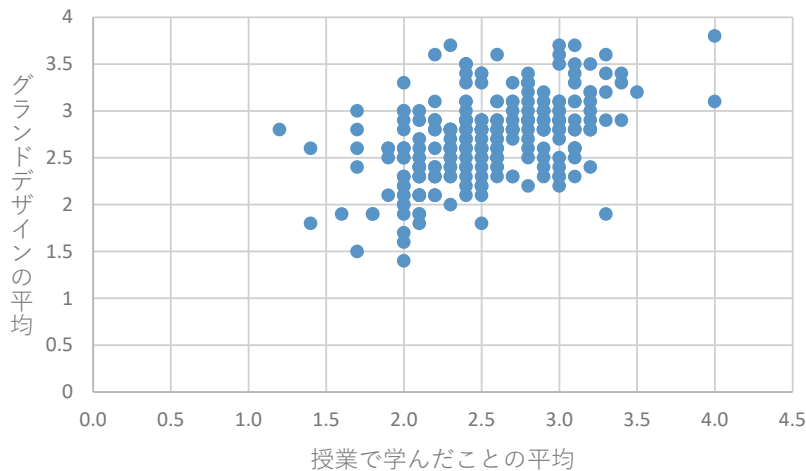


図 5-3 授業で学んだことの自己評価とグランドデザインの関係区分（1 年生）

図 5-3 に示したように、授業で学んだことの自己評価の平均とグランドデザインの平均については一定程度の相関関係が確認できる。

(2) 2 年生

図 5-4 に、表 4-16 にて示した授業で学んだことに対する自己評価の平均（1.0 ～ 4.0）と、4.2（7）にて示した生徒から見た高等学校に対する評価（100 点満点）の関係を示す。

図 5-4 を見ると、1 年生（図 5-1）よりも分散が広いことがわかる。学校運営における目標値として、生徒から見た高等学校に対する評価を 60 以上かつ授業で学んだことに対する自己

評価の平均を 3.0 とした場合と、生徒から見た高等学校に対する評価を 50 以上かつ授業で学んだことに対する自己評価の平均を 2.5 とした場合の生徒比率について、学科別のデータを表 5-5 に示す。

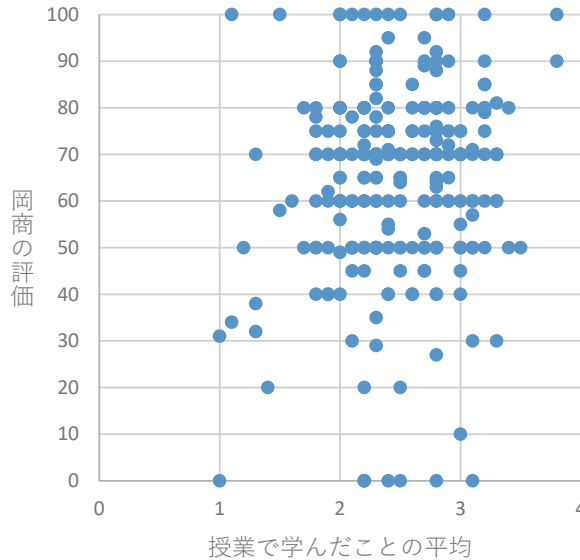


図 5-4 授業で学んだことの自己評価と高等学校に対する評価の関係

表 5-5 高等学校への評価と授業で学んだことの自己評価（2 年生）

	60 以上かつ 3.0 以上	50 以上かつ 2.5 以上
国際ビジネス科	36.4%	54.1%
情報処理科	45.8%	71.7%
総合ビジネス科	40.0%	70.8%
情報会計科	56.0%	78.7%
全体	47.1%	69.6%

図 5-4 および表 5-5 からわかるように、目標値を 50 点以上かつ 2.5 以上の生徒が全体の 7 割近くを占めている。そこで、2 年生においても 1 年生同様に 50 点以上かつ 2.5 以上を基準として、図 5-2 に示す区分にて議論を進めることにする。2 年生における区分 A～区分 D の分布を表 5-6 に示す。

表 5-6 区分 A～D の分布

区分 A	37
区分 B	112
区分 C	17
区分 D	22

表 5-6 に示したように、1 年生と比較すると区分 A が少なく、逆に区分 D が多く 12% の回答を受けている。ここで区分 D の生徒にとってこの 1 年間で最も頑張ったことを表 5-7 に示す。

表 5-7 この 1 年間で最も頑張ったこと（区分 D）

1：勉強（定期考査）	2
2：資格取得	8
3：部活動	2
5：学校行事（文化祭）	4
8：皆勤	5
未回答	1

表 5-7 に示したように、区分 D の生徒にとって、この 1 年間で最も頑張ったこととして資格取得、皆勤、学校行事（文化祭）が上位を占めていることがわかる。表 5-8 と表 5-9 に、区分 D の生徒にとっての部活動の参加有無と評価の分布を示す。

表 5-8 部活動への参加度（区分 D）

はい	13
いいえ	9

表 5-9 部活動に対する評価（区分 D）

100 点	0
80 ～ 99 点	9
60 ～ 79 点	4
40 ～ 59 点	1
39 点以下	

表 5-9 に示したように、部活動に対する評価として 80 ～ 99 点および 60 ～ 79 点への分布が大多数を占めていることから、1 年生同様に学校に対する評価が低くても必ずしも部活動に対する評価が低いとは限らないことがわかる。

次に、グランドデザインの検証を行う。図 5-5 に授業で学んだことの平均と、表 4-18 にて示したグランドデザインの平均との関係を示す。

図 5-5 に示したように、授業で学んだことの自己評価の平均とグランドデザインの平均については、1 年生同様に一定程度の相関関係が確認できる。

5. 2 今後に向けた課題

(1) 部活動のあり方

4 章でも示したように、部活動の参加率が 1 年生終了時点で 92%、2 年生終了時点で 83%、

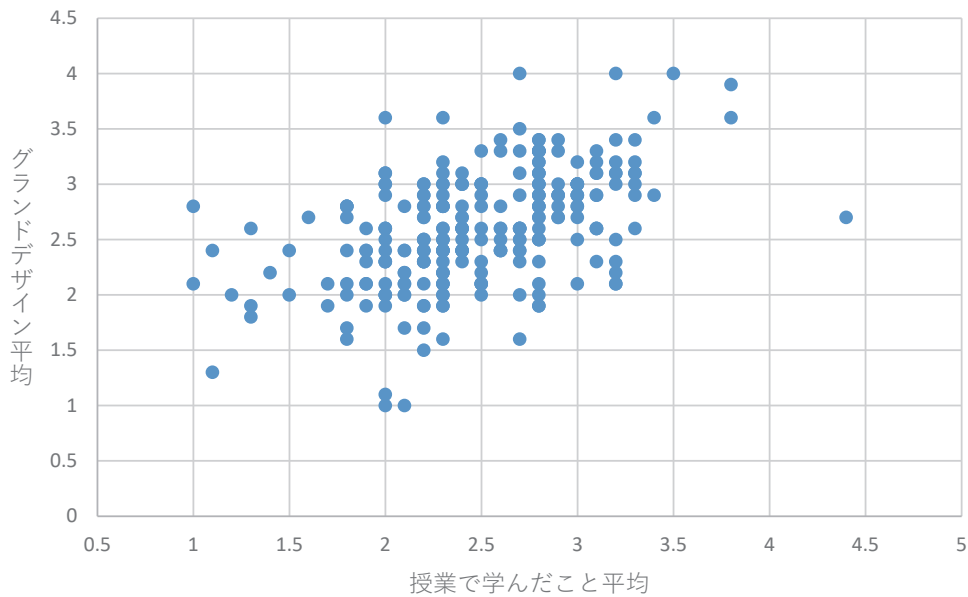


図 5-5 授業で学んだことの自己評価とグランドデザインの関係区分

3年生終了時点で77%と極めて高いことが確認できる。また、1年間で最も頑張ったこととして部活動と回答した生徒が、1年生52名、2年生46名、3年生78名であることから、今後積極的な部活動指導が有効であることがわかる。しかしながら、生徒の多様化、校務分掌の複雑化などにより、教員の業務負担が増大していくことも考えられる。特に、教員が本来行うべき教材研究や生徒対応の時間を確保することは必須であるため、今後に向けて部活動の指導者の外注化、特に教員経験者、教職を志望する大学生、地域においてスキルを持った人材の積極的な活用についても検討を行う必要があるといえる。

(2) コロナ禍における教育のあり方

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、多くの学校で自宅学習やオンライン授業の促進が行われた。これまで、黒板やチョークを用いて授業を行っていた教員は、オンライン授業を行うにあたり、授業準備に多くの時間や手間を費やしている。また、生徒の反応がわかりにくいいため、授業のペースを調整することの困難さなどが浮き彫りになった。

生徒側から見ても、対面授業と比較して緊張感を保ちにくい、通信環境により映像や音声不明瞭で内容の理解が困難といった問題も生じた。

これに加え、実習を伴う授業においては生徒の動きや進捗を確認することが困難であったため、教育効果の低下も指摘されている。

今後、コロナ禍が収束した場合においても、他の感染症のほか災害や不測の事態に備え、表計算やプログラミングなど情報処理系の授業やパソコンを活用した授業だけでなく、理論を学ぶ授業においてもICT機器の活用は必須になると考えられるため、これに対応した授業設計も重要になると考えられる。また、Microsoft TeamsやZOOMなどオンライン授業を行うためのプラットフォームを使いこなすためのスキルを身に付けておく必要があるため、準備に費

やす時間の確保も必要であるほか、授業補助やコンテンツ作成の補助を行う人材の確保なども検討する必要があるといえる。

(3) オンデマンド教育の活用

オンライン授業については、双方向授業の困難さなどが指摘されているが、その一方でパソコン操作など進捗に個人差のある授業については、例えば動画コンテンツを一時停止するなどで、対面授業と異なり自分のペースで学習ができるといった利点もある。また、授業内容を復習する際にも動画コンテンツを繰り返し再生するといった活用も考えられるため、今後は対面授業を補完するためのオンライン授業の録画やオンデマンド配信の活用も有効であるといえる。

また、商業高校などで行われる検定試験対策や資格試験対策においては、試験問題への解答スキルを身に付けさせることに特化した教育を行わなければならない。これを教員が行うと、業務の負担も増大することになる。このため、通常の授業では困難であるが、検定試験対策や資格試験対策においては、専門の業者によるオンデマンド教育の活用も有効であると考えられる。その際、授業コンテンツの制作や発信を業者が行い、授業内容に対する質問に教員が個別対応するといった活用も検討の余地がある。

(4) GIGA スクール時代における授業方法のあり方

GIGA スクール構想により、小中学校において教育用コンピュータ 1 台あたりの児童・生徒数は 2021 年現在 1.4 人となった⁷。また、高等学校においても 1 人 1 台のタブレット端末を用意することが可能となってきた。しかしながら、教員の ICT に対する知識が十分とはいえない、授業コンテンツを作成するための端末が古いまたは未整備、一部の教員に負担が集中するといった問題も生じている⁸。

また、タブレット端末の活用にあたっては単に使用方法を身に付けるだけでなく、授業での活用のほか、課題研究や総合的な学習の時間⁹などで問題発見能力・問題分析能力・問題解決能力を身に付けるツールとしての活用についても検討する必要がある。そして、学校外での利用や授業時間以外での利用は情報漏洩や不適切な使用のリスクも考えられるため、情報モラル教育やセキュリティ対策についても十分に検討を行う必要があるといえる。

6. おわりに

本論文では、多様化するビジネスに対応した教育について検証するために、まず学習指導要領に基づいた共通教科の特徴を示した。そのうえで、ビジネス教育を発展させるために愛知県

⁷ 文部科学省『学校における教育の情報化の実態等に関する調査』

⁸ デジタル庁、総務省、文部科学省、経済産業省『GIGA スクール構想に関する教育関係者へのアンケート結果及び今後の方向性について』

⁹ 2022 年度新入生より「総合的な探求の時間」に科目名称変更予定

立岡崎商業高等学校にて構築したランドデザイン（学校教育全体構想図）について述べた。そして、その成果を評価するための全校生徒を対象としたアンケート調査を行うとともに、その調査結果についての分析および考察を行った。商業高校における生徒の満足度は、必ずしも学習内容のみに依存するわけではなく、課外活動、特別活動および学校行事などについても重要な位置付けになっていることを示した。

今後は、社会の構造の変化に対応したランドデザインの検討を行うとともに、ランドデザインを複数年にわたって継続的に行った際の時系列での変化などについても考察を進めていく予定である。

なお、本研究の一部は愛知学院大学ビジネス科学研究所令和3年度共同研究プロジェクトによるものである。また、アンケート調査にあたっては愛知県立岡崎商業高等学校および同校在校生にご協力いただいた。データの作成や分析にあたっては志毛柚月さん（愛知県立岡崎商業高等学校および本学商学部卒業）¹⁰、内田彩花さん（愛知県立岡崎商業高等学校卒業・現在本学商学部吉田ゼミ3年生）、藏元麻衣さん（同左）にご協力いただいた。ここに感謝申し上げる次第である。

¹⁰ 現在・愛知県立杏和高等学校勤務